

茨城県教育財団文化財調査報告第153集

北浦複合団地造成事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

内宿井戸作城跡

木工台遺跡 3

(旧木工台古墳群)

作業室用

平成 11 年 7 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第153集

北浦複合団地造成事業地内 埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

うちじゅくい どさく
内宿井戸作城跡
ほつくだい
木工台遺跡 3
(旧木工台古墳群)

平成 11 年 7 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、鹿行地域の総合的發展を目指して、東関東自動車道の潮来～水戸間の延伸や、これを補完する国道や主要地方道等の幹線道路の整備を図っております。このため、この地域は、都市的開発の可能性が極めて高くなってきております。このような状況の中で、北浦複合団地整備推進事業が計画されたもので、その予定地内には内宿井戸作城跡をはじめ多くの遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び、平成9年4月から平成10年3月まで木工台遺跡とともに内宿井戸作城跡の発掘調査を実施して参りました。この調査によって貴重な遺構、遺物が検出され、郷土の歴史を解明する上で多大の成果をあげることができました。

本書は、内宿井戸作城跡、木工台遺跡の調査成果を取録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、北浦町教育委員会、北浦町開発課をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成11年7月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により財団法人茨城県教育財団が平成9年度に発掘調査を実施した、茨城県行方郡北浦町大字内宿に所在する内宿井戸作城跡、木上台遺跡（旧木上台古墳群）の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
副 査 平成9年10月1日～平成10年3月31日
整 理 平成11年4月1日～平成11年7月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第1課長沼田文夫の指揮のもと、調査第2班長中山忠久、主任調査員荒井保雄、小林孝、寺門千勝、川村満博、高野節夫が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理課長川井正一の指揮のもと、主任調査員高野節夫が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、出土土器の編年について、北茨城市立中妻小学校教諭櫻村宣行氏に御指導いただいた。
- 6 発掘調査及び整理に際し、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し、内宿井戸作城跡、木工台遺跡3はX軸=+11,560m、Y軸=+60,400mの交点を基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

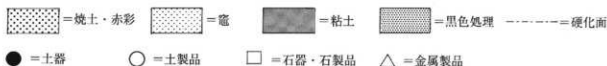
- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 堀・溝-SD 掘立柱建物跡-SB その他-SX

遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本土器-TP

土層 擾乱-K

- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、以下のとおりである。

- (1) 遺跡全体図は縮尺500分の1とし、各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- (2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 「主軸方向」は、堀・竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10° -E N-10° -W)
- (4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台(脚)径 E-高台(脚)高 F-つまみ径 G-つまみ高とし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
- (5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

抄 録

ふりがな	きたうらふくこうだんちどうせいじきょうちないまいどうふんかざいりょうきぼうこくしよ						
書名	北浦複合町地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	内宿井戸作城跡 木上台遺跡3 (旧木上台占墳群)						
巻次	Ⅳ						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第153集						
著者名	高野 節夫						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587						
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587						
発行日	1999(平成11)年7月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
内宿井戸作城跡	茨城県行方郡北浦町 大字内宿字井戸作台 1413番地ほか	08424 53	36度 05分 55秒	140度 30分 20秒	19970401 ~ 19980331	14,909㎡	北浦複合町地 造成事業に伴 う事前調査
木上台遺跡	茨城県行方郡北浦町 大字内宿字井戸作台 1440-11	08424 53	36度 06分 08秒	140度 30分 32秒	19970401 ~ 19980331	871㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
内宿井戸作城跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 11軒	土師器(坏・高坏・甕・瓶) 須恵器(坏・蓋・甕・甌) 土師器(土玉・管状土鍾・ 勾玉・紡錘車・支脚) 石製品(紡錘車・鉄滓)	古墳時代から平 安時代にかけて の集落跡。調査 区の北端と南東 部から土塁が、 北端と南端から 堀が検出され、 中世城郭の一部 の可能性がある。		
		奈良・平安時代	竪穴住居跡 8軒	土師器(坏・甕) 須恵器(坏) 土製器(土玉・支脚) 石製品(砥石) 鉄製品(刀子)			
	城館跡	中世	堀 2条 土 塁 2条				
	その他	時期不明	土 坑 3基				
木上台遺跡	堀付近に盛土があり、古墳と想定して掘り込んだところ、近代の盛土であった。						

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序の検討	7
第3節 遺構と遺物	8
1 古墳時代の遺構と遺物	8
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	54
3 中世の遺構と遺物	63
(1) 土塁	63
(2) 堀	66
4 その他の遺構と遺物	68
(1) 土坑	68
(2) 遺構外出土遺物	70
第4節 まとめ	73

插图目次

第 1 图	内宿井戸作城跡・木工台遺跡調査区 設定図	2	第 27 图	第 14 号住居跡出土遺物実測図	38
第 2 图	内宿井戸作城跡・木工台遺跡周辺遺 跡分布図	6	第 28 图	第 15 号住居跡実測図	39
第 3 图	基本土層図	7	第 29 图	第 15 号住居跡出土遺物実測図	40
第 4 图	第 2 号住居跡実測図	9	第 30 图	第 16 号住居跡実測図	42
第 5 图	第 2 号住居跡出土遺物実測図	10	第 31 图	第 16 号住居跡出土遺物実測図	43
第 6 图	第 3 号住居跡実測図	11	第 32 图	第 17 号住居跡実測図	45
第 7 图	第 3 号住居跡出土遺物実測図	12	第 33 图	第 17 号住居跡出土遺物実測図	46
第 8 图	第 4 号住居跡実測図	13	第 34 图	第 18 号住居跡実測図	48
第 9 图	第 4 号住居跡出土遺物実測図	14	第 35 图	第 18 号住居跡出土遺物実測図	49
第 10 图	第 8 号住居跡実測図(1)	15	第 36 图	第 19 号住居跡実測図	51
第 11 图	第 8 号住居跡実測図(2)	16	第 37 图	第 19 号住居跡出土遺物実測図	53
第 12 图	第 8 号住居跡出土遺物実測図	17	第 38 图	第 1 号住居跡実測図	54
第 13 图	第 10 号住居跡実測図	18	第 39 图	第 1 号住居跡出土遺物実測図	54
第 14 图	第 10 号住居跡出土遺物実測図	19	第 40 图	第 5 号住居跡実測図	55
第 15 图	第 11 号住居跡実測図(1)	22	第 41 图	第 5 号住居跡出土遺物実測図	56
第 16 图	第 11 号住居跡実測図(2)	23	第 42 图	第 6 号住居跡実測図	57
第 17 图	第 11 号住居跡出土遺物実測図(1)	24	第 43 图	第 6 号住居跡出土遺物実測図	58
第 18 图	第 11 号住居跡出土遺物実測図(2)	25	第 44 图	第 7 号住居跡実測図	59
第 19 图	第 12 号住居跡実測図	27	第 45 图	第 7 号住居跡出土遺物実測図	60
第 20 图	第 12 号住居跡出土遺物実測図(1)	28	第 46 图	第 9 号住居跡実測図	61
第 21 图	第 12 号住居跡出土遺物実測図(2)	29	第 47 图	第 9 号住居跡出土遺物実測図	62
第 22 图	第 12 号住居跡出土遺物実測図(3)	30	第 48 图	第 1 号土壘, 第 1 号堀実測図	64
第 23 图	第 13 号住居跡実測図(1)	34	第 49 图	第 2 号土壘実測図	65
第 24 图	第 13 号住居跡実測図(2)	35	第 50 图	第 2 号堀土層断面図・出土遺物実 測図	67
第 25 图	第 13 号住居跡出土遺物実測図	35	第 51 图	第 1・2・3 号土坑実測図	70
第 26 图	第 14 号住居跡実測図	37	第 52 图	遺構外出土遺物実測図	72
			第 53 图	内宿井戸作城跡縄張り図	74

表目次

表 1	内宿井戸作城跡周辺遺跡一覧表	5
表 2	内宿井戸作城跡住居跡一覧表	63
表 3	内宿井戸作城跡土坑一覧表	69

写真図版目次

- PL 1 内宿井戸作城跡遠景, 内宿井戸作城跡全景
- PL 2 第1号住居跡, 第2号住居跡, 第2号住居跡遺物出土状況, 第2号住居跡竈, 第3号住居跡, 第4号住居跡, 第4号住居跡竈, 第5号住居跡
- PL 3 第5号住居跡遺物出土状況, 第5号住居跡竈遺物出土状況, 第6・7・8号住居跡, 第6号住居跡, 第6号住居跡遺物出土状況, 第6号住居跡竈, 第7号住居跡
- PL 4 第7号住居跡遺物出土状況, 第7号住居跡竈遺物出土状況, 第9号住居跡, 第9号住居跡遺物出土状況, 第9号住居跡竈・第9号住居跡竈遺物出土状況, 第10号住居跡, 第10号住居跡遺物出土状況
- PL 5 第10号住居跡遺物出土状況, 第10号住居跡竈, 第10号住居跡竈遺物出土状況, 第11号住居跡, 第11号住居跡遺物出土状況, 第11号住居跡竈遺物出土状況, 第12号住居跡
- PL 6 第12号住居跡遺物出土状況, 第13号住居跡, 第13号住居跡遺物出土状況, 第14号住居跡, 第14号住居跡遺物出土状況
- PL 7 第15号住居跡, 第15号住居跡竈, 第16号住居跡, 第16号住居跡遺物出土状況, 第16号住居跡竈遺物出土状況, 第17号住居跡, 第17号住居跡遺物出土状況
- PL 8 第17号住居跡竈, 第17号住居跡竈遺物出土状況, 第18号住居跡, 第18号住居跡遺物出土状況, 第18号住居跡竈, 第19号住居跡, 第19号住居跡遺物出土状況, 第19号住居跡竈
- PL 9 第1号土坑, 第2号土坑, 第3号土坑, 第1号土坑土層断面, 第2号土坑土層断面, 第2号土坑, 木工台遺跡試掘トレンチ1, 木工台遺跡試掘トレンチ2
- PL 10 第1・2・3・4・7・8・9号住居跡出土遺物
- PL 11 第9・10・11号住居跡出土遺物
- PL 12 第11・12号住居跡出土遺物
- PL 13 第12号住居跡出土遺物
- PL 14 第12・13・14・15号住居跡出土遺物
- PL 15 第16・17・18・19号住居跡出土遺物
- PL 16 第5・12・19号住居跡, 遺構外出土遺物
- PL 17 住居跡, 遺構外出土製品
- PL 18 住居跡, 堀, 遺構外出土石製品・鉄製品・占鏡

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、鹿行地域の総合的發展を目指して、東関東自動車道の潮来～水戸間の延伸や、これを補完する国道や主要地方道路の整備を図っている。このため、この地域は、都市的開発の可能性が極めて高くなってきている。このような状況の中で、北浦複合団地造成事業が計画された。

平成6年3月28日、茨城県は茨城県教育委員会に対し、北浦複合団地造成事業予定地内の三和・内宿・成田及び長野江地区における埋蔵文化財の有無について照会した。茨城県教育委員会は、同年5月11・24日、6月23日に現地踏査、同年10月11～13日、平成7年1月24～26日に試掘調査を実施した。平成7年3月2日に茨城県教育委員会は、事業予定地内に、炭焼遺跡・三和貝塚・札幌古墳群・成田古墳群・木工台遺跡・手配台遺跡及び内宿井戸作城跡・木工台古墳群が所在することを、茨城県に回答した。

平成9年3月6日、茨城県と茨城県教育委員会は、内宿井戸作城跡（14,909㎡）・木工台古墳群（871㎡）の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を行った。同年3月17日、茨城県教育委員会は、茨城県に内宿井戸作城跡・木工台古墳群の現状保存をすることが困難であるため、記録保存の措置を講ずることとし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を照会した。同年2月4日、茨城県教育財団は、茨城県教育委員会と内宿井戸作城跡の発掘調査計画について協議し、2月20日、茨城県教育委員会は、茨城県と内宿井戸作城跡の発掘調査計画について協議した。その結果、同年3月4日、茨城県から茨城県教育委員会あてに発掘調査計画の変更について、異議のない旨の回答があり、3月6日、茨城県教育委員会は、茨城県教育財団あてに内宿井戸作城跡の当初調査予定（14,909㎡）を3,612㎡に変更する旨の回答をした。茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成9年4月1日から木工台遺跡・内宿井戸作城跡・木工台古墳群の発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

内宿井戸作城跡・木工台古墳群（871㎡）の発掘調査は、平成9年4月1日から平成10年3月31日までの1年間、木工台遺跡（平成9年度調査区、21,753㎡）の調査とともに実施された。各遺跡の諸条件、現況等を考慮し、内宿井戸作城跡は10月から3月まで、木工台古墳群は1月にそれぞれ調査を実施した。ここでは、その調査経過についての概要を記述する。

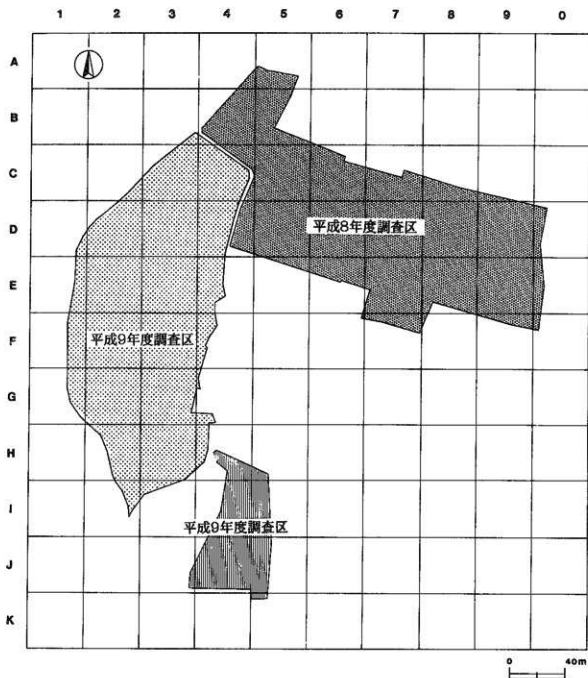
10月 23日から、木工台遺跡の遺構調査と並行して内宿井戸作城跡の樹木の伐間を開始した。

11月 内宿井戸作城跡の伐間が11日に終了した。25日に試掘調査を実施した。

12月 16日から、内宿井戸作城跡の重機による表土除去を開始した。

1月 内宿井戸作城跡の重機による表土除去を7日に終了し、7日、8日に遺構確認作業を実施した。確認された遺構は、住居跡19軒、堀2条、土塁2条、土坑3基である。14日から木工台古墳群の伐間を並行して開始し、16日に終了した。29日、30日の2日間、木工台古墳群に7本のトレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果、遺構・遺物は検出されず、近代以降の盛土と判明したため、調査を終了した。

- 2月 3日に内宿井戸作城跡の方眼杭打ちを実施し、6日から遺構調査を開始した。9日、「木工台遺跡の遺構、遺物について」というテーマで班内研修会を実施し、内宿井戸作城跡の遺物についても研修した。23日、埋蔵文化財の啓発普及のため報道公開を行い、28日には、これまでの調査の成果をもとに現地説明会を開催した。多くの見学者が来跡した。
- 3月 6日、委託者に対するの報告会を実施した。17日までに内宿井戸作城跡の遺構調査をすべて終了した。18日、航空写真撮影を行った。19日までに補足調査を完了した。20日に安全対策を含めた撤収作業を完了し、現場事務所を閉鎖してすべての現地調査を終了した。



第1図 内宿井戸作城跡・木工台遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

内宿井戸作城跡は、茨城県行方郡北浦町大字内宿井戸作台1,413番地ほかに所在している。

北浦町は、茨城県の南東部に位置し、北は鹿嶋郡鉾田町に、東は北浦をはさんで同郡大洋村に、南は行方郡麻生町に、西は同郡玉造町に隣接している。当町は、昭和30年に津澄村、粟村及び武田村の3村が合併して北浦村となり、平成9年10月1日に現在の北浦町となった。

当遺跡周辺の地形を概観すると、北浦湖岸近くまで延びている台地と湖岸沿いの低湿地、及び小河川によって形成された低地にはほぼ分けられる。台地は玉造町方面から潮来町方面に延びる標高35～39mの行方台地で、緩やかな丘陵を形成している。また、湖岸に面した台地の東側には支谷が樹枝状に入り組んでいる。台地の内陸部は、比較的広い台地を形成しているが、先端部分は細長く突出した舌状台地となっている。

地質は、砂鉄質の中粒砂よりなる石崎層、灰褐色のシルトからなる見和下層、黄褐色の中粒砂からなる見和上層、灰色中粒～粗粒の砂からなる竜ヶ崎砂礫層、灰白色粘土層の茨城粘土層、関東ローム層の順で堆積している。

内宿井戸作城跡は、北浦町の北東部、北浦に注ぐ武田川左岸の標高約31～35mの南方へ舌状に張り出した台地上の先端部に位置している。当遺跡の南側の沖積低地は、水田として利用されている。水田と台地との比高は、約15mである。調査前の現況は山林である。

参考文献

- ・ 大森昌衛・蜂須紀夫「茨城の地質をめぐって」1987年8月
- ・ 茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 玉造」1984年11月
- ・ 茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 磯浜・鉾田」1991年3月

第2節 歴史的環境

霞ヶ浦と北浦に面した行方台地は、北浦をはじめとした水系に恵まれており古代から人々の生活に絶好の舞台となってきた。そのため、行方台地は縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。ここでは、当遺跡との関わりが深い古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺跡について述べることにする。

(1) 古墳時代

古墳時代になると、強大な権力を有する豪族は支配者として各地に墳墓を築造するようになり、武田川や山田川流域の台地にも古墳群が形成された。武田川流域には、新橋古墳群<37>、大塚古墳群<14>、新橋古墳群<17>等がある。山田川流域には、ドンビン塚古墳群<19>、うなぎ塚古墳群<49>、1号墳のくびれ部から箱式石棺の出土が報告されている堂日木古墳群<20>等がある。堂日木古墳群(堂日木1号墳)は、箱式石棺の構造から7世紀代の古墳と考えられる。そのほか、北浦西岸の台地上には札幌古墳群<4>、成田古墳群<5>がある。札幌古墳群においては、6世紀後半から8世紀初頭に築造された4基の古墳が確認され、成田古墳群では、7世紀代から8世紀初頭に築造された7基の古墳が確認されている。とりわけ、札幌古墳群第2号墳と成田古墳群第3号墳の被葬者は、遺物や主体部の形状から6世紀末葉から7世紀代の在地勢力の中でも

首長的存在であったと考えられる。集落跡としては、六台遺跡〈32〉、古屋敷遺跡〈31〉、平遺跡〈34〉、今山遺跡〈29〉、古館遺跡〈33〉、風早遺跡〈35〉、炭焼遺跡〈7〉、木工台遺跡（平成9年度調査区）〈3〉等が調査されている。木工台遺跡（平成9年度調査区）は古墳時代後期に大集落を形成しており、前述の古墳築造の時期とはほぼ一致している。

（2）奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡の数は、古墳時代に比べると減少する。この遺跡としては、木工台遺跡（平成8年度調査区）〈3〉の他に、六台遺跡、古屋敷遺跡、平遺跡、今山遺跡、古館遺跡〈33〉、平成3年に調査された菟澤沢遺跡〈43〉がある。木工台遺跡からは、多数の住居跡の他に裂鉄関連遺構が確認されている。

（3）中世

鎌倉・室町時代になると城館跡が主になり、武田川流域には、武田氏が築いた神明城跡〈9〉、木崎城跡〈12〉、小貫館跡〈51〉、西館跡〈10〉及び内宿館跡〈8〉等が所在している。山田川流域左岸台地上には、山田氏が築いた山田城跡〈36〉、前館跡〈42〉、古館遺跡、古屋敷遺跡及び平遺跡等が所在している。同流域右岸台地上には、小幡氏が築いた小幡城跡〈52〉、古屋敷館跡〈25〉、前原館跡〈26〉等が所在している。このうち、昭和62年に神明城跡、昭和63年から平成元年にかけて古館遺跡、古屋敷遺跡及び平遺跡、平成6年に木崎城跡が調査されている。神明城跡は、二の郭、三の郭及び一の堀の一部が調査され、堀、土塁が確認されている。古屋敷遺跡では、掘立柱建物跡、土塁、堀、溝、虎口及び製鉄跡等が確認されており、16世紀後半代に城郭としての縄張りを完成させたものと考えられる。古館遺跡では、掘立柱建物跡、土塁及び虎口等が確認されている。時期は3期に区分され、Ⅰ期は山田氏が築城した時期、Ⅱ、Ⅲ期は16世紀の戦国期と考えられている。木崎城跡は、舌状に張り出した台地上に構築された連郭式の平丘城であり、堀、土塁、馬出部等が確認されている。

※文中の〈 〉内の番号は、第2図及び周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

〈註〉

- （1）茂木雅博「室日木1号墳調査報告」『茨城考古学』第1号 茨城考古学会 1968年3月
- （2）茨城県教育財団「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 炭焼遺跡 札幌古墳群 三和只塚 成田古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第130集 1998年3月
- （3）山田地区遺跡発掘調査会『六台遺跡調査報告書』1990年3月
- （4）山田地区遺跡発掘調査会『古屋敷遺跡調査報告書』1990年3月
- （5）山田地区遺跡発掘調査会『平遺跡調査報告書』1990年3月
- （6）山田地区遺跡発掘調査会『今山遺跡調査報告書』1990年3月
- （7）山田地区遺跡発掘調査会『古館遺跡調査報告書』1990年3月
- （8）山田地区遺跡発掘調査会『風早遺跡調査報告書』1990年3月
- （9）茨城県教育財団「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 木工台遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第140集 1998年9月
- （10）菟澤沢遺跡調査会『菟澤沢遺跡調査報告書』1991年11月
- （11）茨城県教育財団「主要地方道十浦・大洋線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 神明城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第48集 1988年9月
- （12）茨城県教育財団「国道354号国補道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 木崎城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第109集 1996年3月

表1 内宿井戸作城跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代					番号	遺跡名	県遺跡番号	時代					
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安				中近世以降	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安
①	内宿井戸作城跡					○	○	27	千両山古墳群	1418				○		
2	木工台遺跡	1164				○	○	28	領領塚(領領跡)	1437		○		○	○	
3	札幌古墳群	1478				○		29	中山古墳群	1421				○		
4	成田古墳群	1479				○		30	古歴塚(遺)跡	1428				○	○	○
5	塚原古墳群	1412				○		31	六台貝塚(六台遺跡)	1436		○		○	○	
6	炭焼遺跡					○	○	32	古館(遺)跡	1426	○			○	○	○
7	内宿館跡	1487					○	33	平遺跡	1439		○		○	○	○
8	神明城跡	1429					○	34	風早遺跡					○		
9	西館跡	1433					○	35	山田城跡	1425						○
10	内宿遺跡	1489					○	36	新橋古墳群	1415				○		
11	木崎城跡	1430					○	37	中山遺跡	1441				○	○	
12	下山遺跡	1466		○	○	○		38	京田古墳群	5168				○		
13	大塚古墳群	1470					○	39	笠入古墳群	5167				○		
14	松並古墳群	1417					○	40	前館遺跡	1467				○		
15	権現山古墳群	1414					○	41	前館跡	1427						○
16	新掘古墳群	1471					○	42	菖蒲沢遺跡			○		○	○	
17	殿山古墳群	1469					○	43	清水台古墳群	1420				○		
18	フニン塚古墳群	1482					○	44	台山古墳群	1422				○		
19	堂目本古墳群	1483					○	45	北原古墳群	1416				○		
20	大峰古墳群	1481					○	46	両宿神明遺跡	5174		○	○	○		
21	地藏後古墳群	1485					○	47	塚原古墳群	1480				○		
22	古歴半遺跡	1453		○	○	○		48	うなぎ塚古墳群	5166		○	○	○		
23	関戸遺跡	1472		○	○	○		49	諏訪後古墳群	1421				○		
24	古屋台館跡	1432					○	50	小貫館跡	5173						○
25	前原館跡	1488					○	51	小幡城跡	1431						○
26	御門山古墳群	1486		○		○		52	南高岡平遺跡	5164		○	○	○		



第2図 内宿井戸作城跡・木工台遺跡周辺遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

内宿井戸作城跡は、北浦町の北東部、行方台地東部の標高31～35mの台地縁辺部から南に伸びる舌状台地上に位置する。その東側には北浦が湖水を湛えている。調査区は、東西約55m、南北約100m、面積3,612㎡であり、現況は山林である。遺跡の北側には、木工台遺跡があり、支谷を挟んで西側には、内宿館跡、南側に武田川を挟んで内宿遺跡、木崎城跡がある。

今回の調査によって、竪穴住居跡19軒、土坑3基、堀2条、土塁2条を検出した。竪穴住居跡は古墳時代後期11軒、奈良・平安時代8軒である。また、調査区の北端と南東部から土塁が、北端と南端から堀が検出されており、ここが中世城郭の一部であったと考えられる。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に17箱出土した。遺物の大部分は古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器や須恵器で、竪穴住居跡の覆土及び床面から出土している。

第2節 基本層序の検討

調査区北西部（B5f4区）にテストピットを掘り、基本層序の観察を行った（第3図）。ソフトロームはなく、表土直下からロームはすべてハードロームである。

第1層は、耕作土。厚さ約50cmで極暗褐色をしている。

第2層は、厚さ12～14cmの暗褐色のローム層で、武蔵野台地等という第1黒色帯に相当するものと考えられる。

第3層は、厚さ16～32cmの褐色のローム層で、始良Tn火山灰（AT）層が含まれる。

第4層は、厚さ20～34cmの締まりある褐色のローム層で、武蔵野台地等という第2黒色帯に相当するものと考えられる。

第5層は、厚さ38～56cmの褐色のローム層で、第4層より粘性が強く締まりもある。

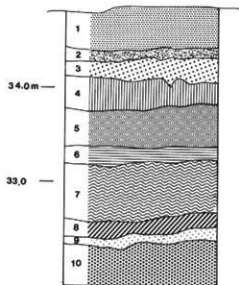
第6層は、厚さ14～20cmの褐色のローム層で、第5層と同じく粘性・締まりとも強い。

第7層は、厚さ56～62cmの暗褐色のローム層で、粘性・締まりとも強い。

第8層は、厚さ10～18cmの暗褐色のローム層で、第7層と同じく、粘性・締まりとも強い。

第9層は、厚さ10～14cmの暗褐色のローム層で、締まりもあるが、特に粘性が強い。

第10層は、厚さ40～50cmの灰褐色の粘土層で、黒色の火山灰粒子を含み、粘性もあるが、特に締まりが強い。遺構は第2層上面で確認され、第3、4層を掘り込んで構築されている。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

今回の調査によって古墳時代の竪穴住居跡12軒が確認されている。時期は、そのすべてが古墳時代後期(6世紀)と考えられる。以下、検出した住居跡の特徴や遺物について記載する。

第2号住居跡(第4図)

位置 調査区の中央部、I4c9区。

重複関係 本跡が、第19号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.20m, 短軸5.05mの方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は25~52cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅18~28cm, 下幅8~18cm, 深さ4~10cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、P1付近と南側の一部分が踏み固められている。

ピット 6か所(P1~P6)。P1~P4は、長径25~38cm, 短径21~31cmの楕円形、深さ27~71cmである。規模と配列から土柱穴と考えられる。P5は径22cmの円形、深さ45cmで出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は径75cmの円形、深さ20cmであり、竈東端部の東側に掘り込まれている。位置と上層の含有物から竈に関連するピットと思われる。P6の上部には灰、粘土粒子を含む焼土塊がみられる。

P5(第8~12層)・焼土塊(第1~7層)土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子少量、焼土中ブロック少量、粘土粒了、炭微炭
- 2 灰褐色 焼土粒子少量、粘土粒了、炭微炭
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、ローム小ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック少量、焼土中ブロック、炭微炭
- 5 濃い褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子、ローム小ブロック少量
- 6 褐色 焼土粒子、ローム小ブロック、粘土粒了少量、焼土中・小ブロック微量
- 7 灰褐色 ローム中・小ブロック、粘土粒子少量
- 8 灰褐色 焼土小ブロック、ローム粒了、焼土小ブロック少量、焼土大ブロック、焼土粒子、炭化物微量
- 9 暗赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、ローム小ブロック、粘土粒了少量、焼土中ブロック、ローム大ブロック微量
- 10 暗赤褐色 炭化粒子、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック、焼土粒子、ローム小ブロック微量
- 11 暗赤褐色 焼土小ブロック、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子、ローム大ブロック微量
- 12 暗赤褐色 ローム小ブロック、ローム粒了多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック多量

竈 北壁中央部やや東寄りに、砂碇じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から吹き口部まで101cm, 両袖最大幅122cm, 壁外への掘り込みは48cmである。火床部は、床面を2cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

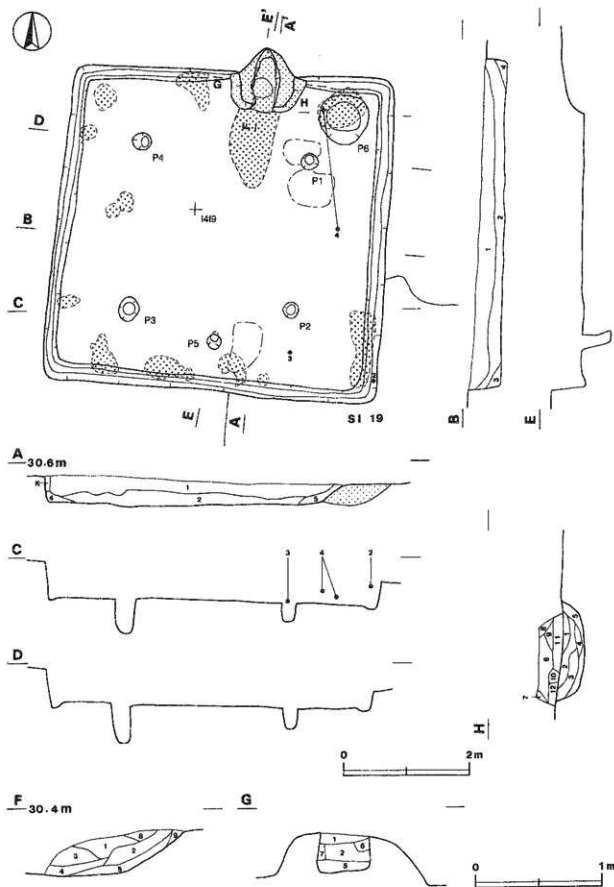
竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒了、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子、粘土粒子、炭微炭
- 2 暗赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒了、粘土粒了、炭微炭
- 3 暗赤褐色 炭化物少量、焼土小ブロック、粘土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子、炭化粒子、炭少量、焼土中・小ブロック、炭化物、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒了、炭少量、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 6 濃い赤褐色 焼土粒子、粘土粒子少量、焼土中・小ブロック、炭化物、炭化粒子、炭微炭
- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒了少量、焼土中・小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム粒子、粘土粒子微量
- 8 褐色 焼土粒了中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、炭微炭
- 9 褐色 焼土小ブロック、焼土粒了、炭化物、炭化粒子、ローム粒子、粘土粒子微量

覆土 5層からなり、ロームブロックの含有が多く、人為堆積と考えられる。

土層解説

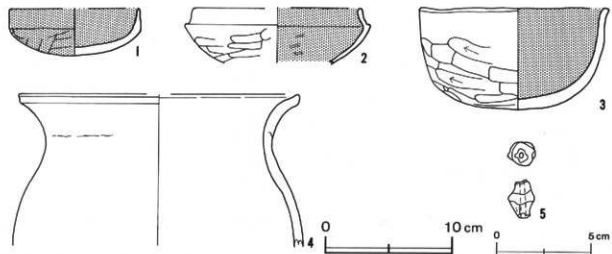
- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子、炭化粒子、ローム中ブロック、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック少量、焼土粒了、炭化粒子、ローム粒了微量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子少量
- 4 灰褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック、粘土粒子少量、焼土小ブロック、焼土粒子微量



第4图 第2号住居跡実測図

遺物 土師器片440点(坏片81点, 高坏片6点, 壺片353点), 須恵器片9点(蓋片5点, 壺片4点), 土製品1点, 混入とみられる陶器片4点, 縄文土器片9点が出土している。覆土上層では, 第5図2の土師器坏が南東コーナー部から出土している。床面では, 3の土師器碗が南東コーナー部付近から逆位で出土している。4の土師器壺は竈東側の覆土上層と東壁付近の覆土下層から出土した破片が接合している。1の土師器坏は覆土中から, 5の不明土製品は覆土下層から出土している。

所見 本跡の四隅や壁下付近に焼土塊がみられる。焼土塊の土層は, 下層がローム, 粘土, 砂粒混じり, 上層が焼土で人為堆積と考えられる。この焼土は, 住居を廃絶する際に竈を壊して投棄された可能性がある。時期は, 遺構の重複関係や土師器坏の形状等から6世紀後葉と考えられる。



第5図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第5図 1	土師器 坏	A [10.4] B 3.8	底部から口縁部片, 丸底。体部は内 壁して立ち上がり, 口縁部は直立す る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り, 内面ナデ。内・外面黒色処 理。	石英 褐色 普通	P3 60% PL10 覆土中
2	土師器 坏	A [13.2] B (4.4)	体部から口縁部片。体部は内壁して 立ち上がり, 口縁部との境に明瞭な 段を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り, 内面へラ磨き。内面黒色処 理。	長石・石英・雲母・ スコリア にぶい褐色 普通	P2 20% PL10 覆土中
3	土師器 碗	A 15.0 B 8.0	丸底。体部は内壁して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り, 内面ナデ。内面黒色処理。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P4 100% PL10 床面
4	土師器 壺	A [22.2] B (12.0)	体部上位から口縁部片。体部は内壁 して立ち上がり, 口縁部は外反する。 底部は外上方にわずかにつまみ上げ られている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面ナデ。輪轆み製。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P5 20% 覆土中

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
5	不明土製品	2.0	1.4	0.2	2.8	覆土中	DP1 PL17

第3号住居跡（第6図）

位置 調査区の中央部，I 5h1区。

規模と平面形 東側の壁と床は斜向部のため流出しており，規模や平面形は明確ではないが，残存する壁や踏み固められた床面から長軸5.10m，短軸 [3.60] mの長方形と推定される。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は6~14cmで，外傾して立ち上がる。

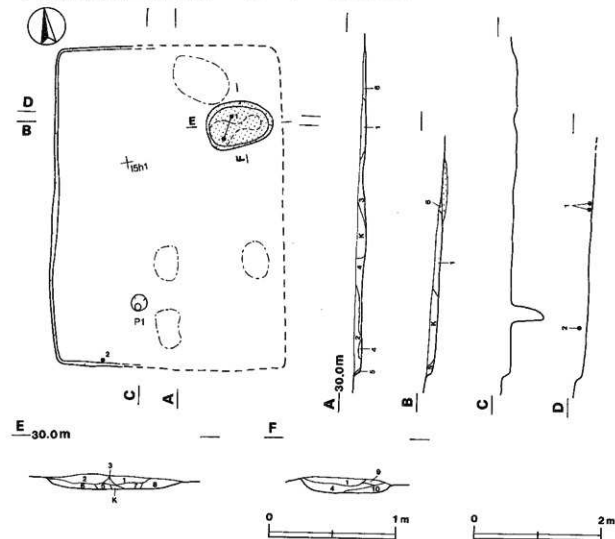
床 平坦で，北側と南側と東側の一部が踏み固められている。

ピット P1は，径24cmの円形，深さ52cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 東壁北寄りに，火床部のみ残存する。火床部は長径106cm，短径70cmの楕円形で，床面を10cmほど掘りくぼめており，火熱を受け赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量，焼土小ブロック，焼土粒子，ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量，焼土中・小ブロック，ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム大ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック，ローム粒子少量，焼土小ブロック，焼土粒子，ローム大・中ブロック，粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム，粘土粒子微量
- 6 赤褐色 焼土中・小ブロック，焼土粒子中量，焼土粒子，ローム大ブロック，ローム粒子，粘土粒子微量
- 7 相隣赤褐色 焼土小ブロック，焼土粒子，ローム小ブロック，ローム粒子少量，炭化物微塵



第6図 第3号住居跡実測図

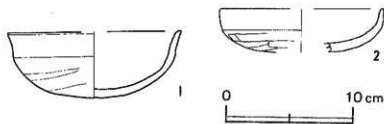
- 8 赤褐色 焼上粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム小ブロック少量
 9 黒褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、焼上粒子微量
 10 褐色 ローム小ブロック、ローム粒子多量、焼土粒子微量

覆土 6層からなるが、覆土が薄いため堆積状況は明確ではない。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
 2 暗褐色 ローム大・中・小ブロック、ローム粒子微量
 3 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量
 4 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子少量、ローム大ブロック微量
 5 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
 6 極暗赤褐色 焼土小ブロック、焼上粒子少量、ローム小ブロック、ローム粒子微量

遺物 土師器片167点（坏片33点、高坏片1点、甕片133点）、須恵器片3点（坏片3点）、鉄滓55.0g、混入とみられる陶器片1点、縄文土器片2点が出土している。覆土上層では、第7図2の土師器坏が南壁際から出



土している。1の土師器坏は、甕内から出土した破片が接合したものである。所見 本跡の時期は、第7図1・2の土師器坏と土師器細片の形状等から判断して6世紀後葉と考えられる。

第7図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	土師器 十 坏	A [13.7] B 5.2	皿部から口縁部片、丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に筋を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英にぶい・褐色普通	P7 55% PL10 甕内 一次焼成
2	土師器 十 坏	A [13.0] B (3.4)	皿部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外側横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・雲母にぶい・褐色普通	P6 30% 覆土中

第4号住居跡（第8図）

位置 調査区の北東部、I 5el区。

規模と平面形 長軸4.30m、短軸(2.40)mで方形と推定される。

主軸方向 N-11°-W

壁 壁高は58~66cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅16~36cm、下幅4~12cm、深さ6~12cmで、断面形はU字状である。

床 平床で、中央部は踏み固められている。

ピット 3か所（P1~P3）。P1~P2は、径25cmの円形、深さ40~48cmである。規模と配列から支柱穴と考えられる。P3は径29cmの円形、深さ25cmである。位置から補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで126cm、両袖最大幅146cm、壁外への掘り込みは34cmである。火床部は、床面をわずかに掘りくはめており、火熱を受けて変変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

土層解説

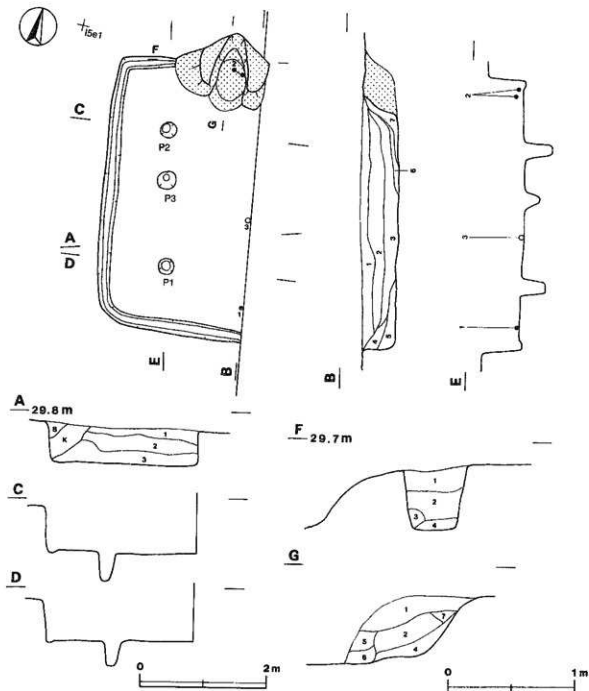
- 1 暗褐色 焼土粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土小ブロック、粘土粒子微量
 2 にぶい褐色 焼土小ブロック、ローム小ブロック、粘土小ブロック少量、焼土中ブロック、粘土粒子微量
 3 灰褐色 粘土粒子少量、焼土小ブロック、ローム粒子微量
 4 極暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、粘土粒子、灰少量、ローム小ブロック微量

- 5 暗赤褐色 焼上人・中ブロック、ローム小ブロック、粘土粒子少量、焼上小ブロック、粘土粒微量
- 6 暗褐色 焼十粒子、ローム小ブロック少量、焼上小ブロック、ローム中ブロック、粘土粒子微量
- 7 褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒了、粘土粒子微量

覆土 8層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

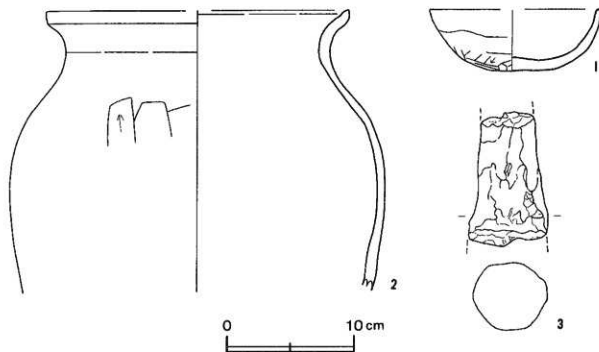
- 1 黒褐色 ローム大・中ブロック少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム大・中・小ブロック、ローム粒子少量、焼上粒微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、焼上粒、ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒了、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 5 褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、ローム中ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒了少量、焼十粒子、ローム中ブロック微量
- 7 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒了少量、焼十粒子、粘土粒微量
- 8 褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、ローム中ブロック微量、ローム大ブロック少量



第8図 第4号住居跡実測図

遺物 土師器片356点(坏片50点, 高坏片3点, 甕片303点), 須恵器片6点(坏片3点, 甕片3点), 上製品4点, 縄文土器片3点が出土している。床面では, 第9図1の土師器坏が南壁部付近から正位で, 3の支脚が中央部から出土している。2の土師器甕は, 甕内の覆土下層から出土した破片が接合している。

所見 本跡の時期は, 遺物の形態及び土師器坏の形状から6世紀後葉と考えられる。



第9図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	高測尺(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	坏 土師器	A [13.5] B (4.9)	底部から11條部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は短く直立する。	11條部内・外面横ナデ。体部外面へナダり, 内面ナデ。輪轆み痕。	石灰・雲母・バミス に ぶ い 橘 色 普通	P8 66% PL10 床面 二次焼成
2	甕 土師器	A [24.0] B (22.0)	体部から11條部片。体部に内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。補器は上方にわずかにつまみ上げられている。	11條部内・外面横ナデ。体部外面へナダり後, ナデ。内面ナデ。	石灰・雲母 に ぶ い 橙 色 普通	P9 20% 甕内

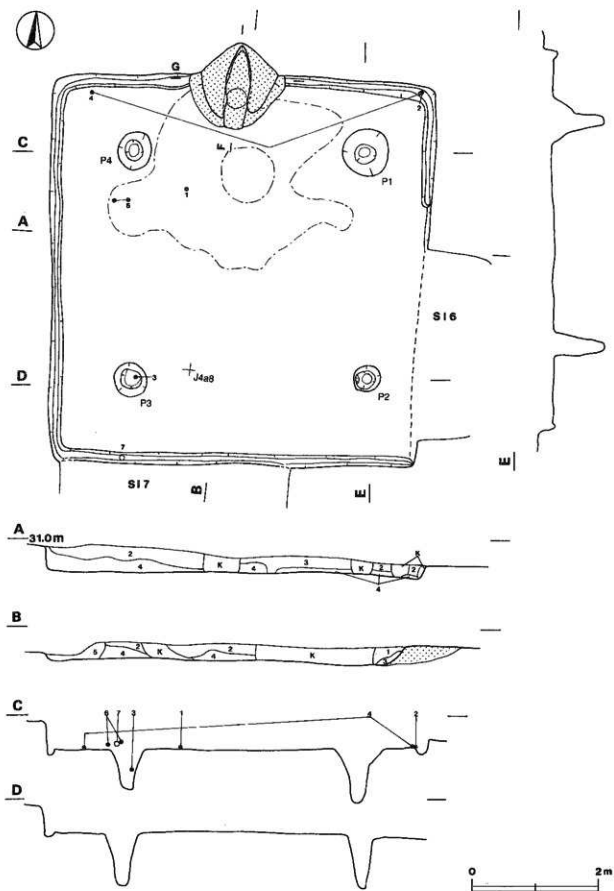
図版番号	器種	計測値			出土地点	備考	
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)			
3	支脚	(10.5)	(6.2)	(305.4)	床面	DP2	60% PL17

第8号住居跡(第10・11図)

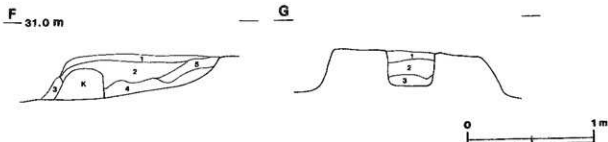
位置 調査区の中央部, I 4 j8区。

重複関係 本跡は, 第6・7号住居に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.15m, 短軸6.05mの方形である。



第10图 第8号住居跡実測图(1)



第11図 第8号住居跡実測図(2)

主軸方向 N-3°-W

壁 壁高は10~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第6号住居跡によって掘り込まれている東壁下の南側を除いて巡っている。上幅14~24cm、下幅5~11cm、深さ7~8cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、竈付近から中央部にかけて踏み固められている。

ピット 4か所(P1~P4)。P1~P4は、長径44~77cm、短径11~74cmの楕円形、深さ63~84cmである。規模と配列から支柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで135cm、両袖最大幅152cm、壁外への掘り込みは45cmである。火床部は、床面をわずかに掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 1 褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 2 褐色 粘土粒子少量、焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、炭微量
- 3 暗褐色 焼土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 4 暗褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、灰少砂、炭化物、ローム粒子、粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土大・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、粘土粒子、炭微量

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

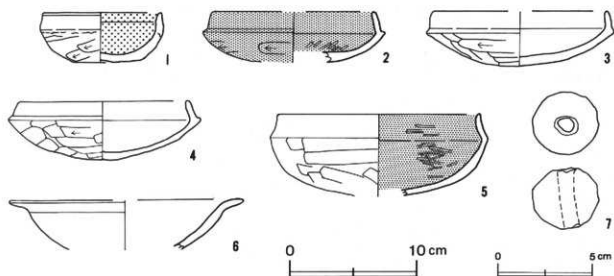
- 1 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 3 灰褐色 ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子少量、焼土小ブロック、焼土粒子、ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子少量
- 5 灰褐色 粘土粒子中量、ローム中・小ブロック、ローム粒子少量

遺物 土師器片207点(坏片46点、甕片161点)、須恵器片2点(坏片2点)、ミニチュア土器片1点、土製品1点、混入とみられる縄文土器片1点、弥生土器片11点が出土している。覆土下層では、第12図6の土師器高坏が中央部西側から、7の土師器片が南壁下から出土している。床面では、1の土師器坏が中央部北西側から正位で、2の土師器坏が北東コーナー部から、4の土師器坏が北西コーナー部から正位で出土している。3の土師器坏はP3内の覆土中から、5の土師器坏は竈内の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、土師器坏の形状や遺物の形態から6世紀後葉と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	土師器	A 9.4 B 3.8 C 5.5	口縁部一部欠損。平底。体部は内背して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面輪ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。体部内面赤彩。	雲母・パミス 明赤褐色 普通	P21 95% PL10 底面



第12図 第8号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 2	坏 土師器	A (12.8) B (3.9)	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部との境に 明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り、内面へラ磨き。内・外面黒 色処理。	雲母・バミス にふい褐色 普通	P23 50% PL10 床面 二次焼成
3	坏 土師器	A (14.0) B 3.9	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部との境に 明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り、内面ナデ。	雲母・スコリア 褐色 普通	P22 50% P3内
4	坏 土師器	A 13.4 B 4.6	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部との境に 明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り、内面ナデ。	石英・雲母 褐色 普通	P24 80% PL10 床面
5	坏 土師器	A 16.0 B (6.4)	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部との境に 弱い稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り、内面へラ磨き。内面黒色処 理。	長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	P25 50% PL10 竈内
6	高 土師器	A (18.6) B (3.9)	坏部片。体部は内彎気味に立ち上 がり、体部と口縁部との境に弱い稜 を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面器面荒れ。	長石・石英・雲母・ スコリア にふい黄褐色 普通	P26 10% 覆土中 二次焼成

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
7	土 玉	3.5	3.2	1.1	33.0	覆土中	D P3 90% PL17

第10号住居跡 (第13図)

位置 調査区の中央部、J 4 d5区。

平面形 長軸3.15m、短軸3.06mの方形である。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は52~56cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下と南西コーナー部を除いて巡っている。上幅11~22cm、下幅3~9cm、深さ4~7cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部の一部が踏み固められている。

竈 北壁中央部やや東寄りに、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで81cm、両袖最大幅〔79〕cm、壁外への掘り込みは33cmである。火床部は、床面をわずかに掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 1 褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒了多量
- 2 灰褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子、ローム中ブロック、ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、焼土中ブロック少量
- 4 極暗赤褐色 焼土大・小ブロック、焼土粒子、ローム小ブロック、粘土粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土大ブロック中量、焼土粒子少量、焼土中・小ブロック、炭化物、炭化粒子、粘土粒子、灰微量
- 6 褐色 ローム中・小ブロック多量
- 7 褐色 ローム粒了多量

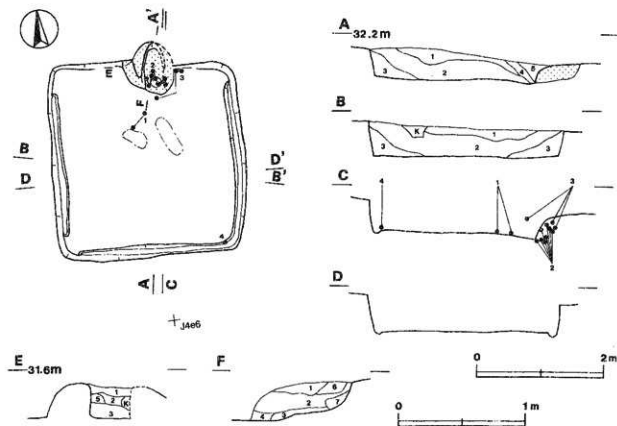
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

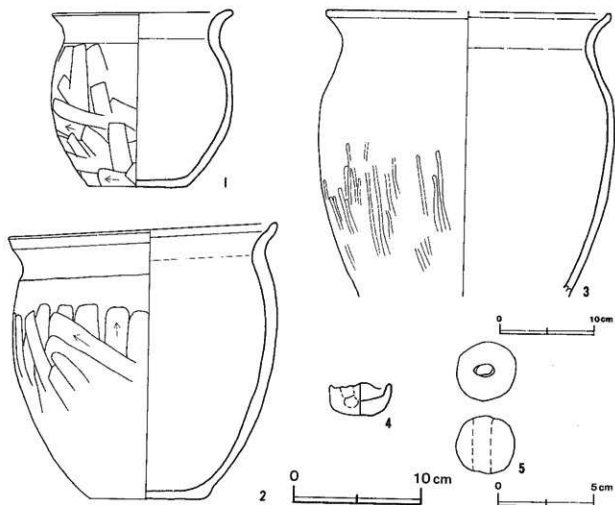
- 1 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒了少量、焼土粒子、ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子、炭化物、ローム中ブロック、ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子、ローム中ブロック微量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土、ローム粒了微量
- 5 褐色 ローム小ブロック、ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量

遺物 土師器片119点（坏片26点、碗片3点、壺片90点）、須恵器片1点（坏片1点）、土製品1点、混入とみられる縄文土器片2点、弥生土器片3点が出土している。覆土中層では、第14図3の土師器壺が甕付近から出している。覆土下層では、4の手捏土器碗が南東コーナー部から逆位で出している。床面では、1の土師器壺が中央部北側から出している。2の土師器壺は、竈内の覆土中層から下層にかけて出た破片が接合している。5の土器は、竈内の覆土中から出している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第13図 第10号住居跡実測図



第14図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	甕 土師器	A 14.3	胴部一部欠損。平底。体部は内摩して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	雲母・パミスにふい橙色 普通	P34 50% PL11 庫内
		B 13.9				
		C 8.0				
2	甕 土師器	A 21.1	口縁部一部欠損。体部は内摩して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は外上方にわずかにつみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	石英・雲母・パミスにふい橙色 普通	P36 95% PL11 庫内
		B 22.0				
		C 8.6				
3	甕 土師器	A [30.0]	体部から口縁部削。体部は内摩して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削き、内面ナデ。内面節面刺磨。	石英・雲母にふい橙色 普通	P35 45% PL11 庫上中
		B [30.0]				
4	手捏土器 土師器	A 4.7	口縁部一部欠損。丸底。体部から口縁部にかけて内摩して立ち上がる。	口縁部横ナデ。体部外面ナデ、内面指ナデ。指置痕。	長石・石英・雲母にふい橙色 普通	P37 90% PL11 庫上中
		B 2.5				
		C 2.0				

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
3	土次	3.1	2.6	1.1	27.3	庫内	DP4 100% PL17

第11号住居跡(第15・16図)

位置 調査区の中央部、J4c9区。

規模と平面形 長軸7.96m、短軸7.87mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は20~64cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅15~30cm、下幅3~14cm、深さ3~8cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部と南側の一部が踏み固められている。

ピット 6か所(P1~P6)。P1~P4は、径37~45cm、深さ70~87cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径54cm、短径46cmの楕円形、深さ29cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は長径38cm、短径32cmの楕円形、深さ27cmである。位置から、P6の補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に、砂詰めりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から吹き口部まで120cm、両袖最大幅156cm、壁外への掘り込みは26cmである。火床部は、床面を6cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

瓦土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 3 褐色 粘土粒子少量、焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化粒子少量、炭化物、ローム粒子、粘土粒子、炭微量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 6 にぶい褐色 粘土粒子少量、焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、炭微量
- 7 暗赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、粘土粒子、炭少量
- 8 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム粒子、粘土粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、粘土粒子少量、炭化粒子、ローム粒子、炭微量
- 10 暗赤褐色 焼土粒子、粘土粒子少量、焼土小ブロック、炭化粒子微量
- 11 にぶい赤褐色 焼土粒子、粘土粒子少量、焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子微量
- 12 にぶい赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、粘土粒子少量、焼土中ブロック、炭化物、炭化粒子、炭微量
- 13 暗赤褐色 焼土粒子、炭化粒子少量、焼土小ブロック、粘土粒子、炭微量
- 14 暗褐色 炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 15 暗赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量

覆土 11層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム大・中・小ブロック、ローム粒子微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック少量、炭化物、炭化粒子、ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子少量、炭化物、炭化粒子、ローム大・中・小ブロック微量
- 6 暗褐色 焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土中ブロック、焼土粒子少量、焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 8 褐色 ローム大・中ブロック、ローム粒子少量、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック微量
- 9 暗褐色 炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 10 褐色 炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 11 褐色 ローム大ブロック中量、ローム粒子少量、炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック微量

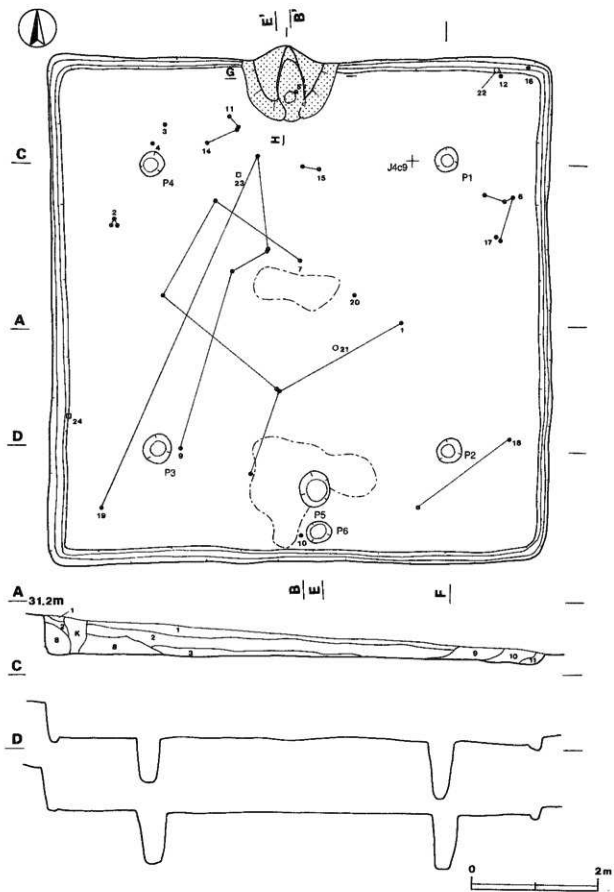
遺物 土師器片926点(坏片253点、高坏片51点、鉢片7点、甕片615点)、須臾器片4点(蓋片1点、甕片3点)、ミニチュア土器片2点、土製品2点、石製品2点、鉄滓10g、混人とみられる縄文土器片2点、弥生土器片3点が出土している。第17、18図覆土上層では、2の土師器坏が西壁付近から、3の土師器坏が中央部北西側から出土している。覆土中層では、4の土師器坏が中央部北西側から、14の土師器高坏、23の白土が中央部北側から、20の土師器ミニチュア土器、21の上玉が中央部から出土している。覆土下層では、6の土師器坏が東壁付近から、10の土師器鉢が中央部南側から、24の不明石製品が西壁際から、12の土師器高坏、16の土師器甕が北東コーナー部から、11の土師器高坏が竈付近から、15の土師器高坏が中央部北側から出土している。床面では、17の土師器甕が東壁付近から、22の支脚が北東コーナー部から出土している。竈内では、5の土師器坏が覆土下層から出土している。1の土師器坏は、中央部と中央部南側から出土した破片が接合したものである。7の土師器坏は、中央部と中央部北西側と中央部西側の覆土中層から出土した破片が接合したものであ

る。18の土師器莖は、東壁付近と南壁付近の覆土中層から出土した破片が接合したものである。19の土師器瓶は、中央部北側の覆土下層と南西コーナー部付近の覆土上層から出土した破片が接合したものである。9の土師器碗は、中央部南西側の覆土下層と中央部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。8の上師器杯は覆土上層から、13の上師器高杯は竈内の覆土中から出土している。

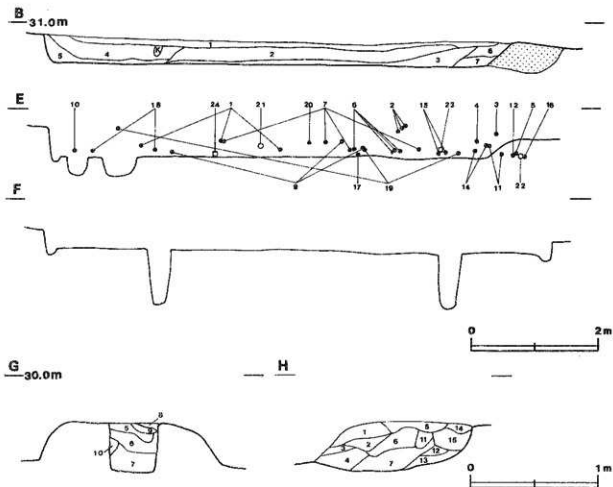
所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀中葉と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	高・口径(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	土師器 杯	A (11.4)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ヘラ磨き。内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア に多い橙褐色 普通	P40 80% PL1 覆土中
		B 3.8				
2	土師器 杯	A [12.4]	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ヘラ磨き。内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	雲母・バミス に多い赤褐色 普通	P38 30% 覆土中
		B 3.8				
3	土師器 杯	A [14.3]	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	雲母 に多い橙褐色 普通	P45 20% 覆土中
		B (3.2)				
4	土師器 杯	A 13.2	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア に多い黄褐色 普通	P41 70% PL1 覆土中
		B 4.0				
5	土師器 杯	A [16.5]	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	石英・バミス 棕色 普通	P38 25% 竈内・覆土中
		B (3.8)				
6	土師器 杯	A [14.2]	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	雲母・バミス に多い橙褐色 普通	P44 30% PL1 覆土中
		B (4.4)				
7	土師器 杯	A 15.0	口縁部 頸欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	石英・雲母 に多い橙褐色 普通	P42 95% PL1 覆土中
		B 4.0				
8	土師器 杯	A 15.1	底部 頸欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア に多い橙褐色 普通	P43 80% PL1 覆土中
		B (4.7)				
9	土師器 碗	A 15.6	外部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。内面黒色処理。体部外面部磨光。	石英・雲母 に多い橙褐色 やや小良	P46 70% PL1 覆土中
		B 8.3				
		C [5.4]				
10	土師器 碗	A [23.8]	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラ磨き。内面黒色処理。	雲母・スコリア に多い橙褐色 普通	P47 60% PL12 覆土中
		B 11.4				
11	高土師器 杯	A [10.0]	杯部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面へラ磨き。内・外面赤彩。体部内面磨面滑。	長石・石英・雲母 に多い橙褐色 普通	P49 30% PL1 竈内
		B (4.8)				
12	高土師器 杯	A [24.0]	杯部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き。内面ナデ。内・外面赤彩。	石英・雲母 赤色 普通	P48 20% 覆土中
		B (5.3)				
13	高土師器 杯	D 14.8	胴部片。胴部はラッパ状に開く。	胴部外面縦位のヘラナデ。裾部内・外面横ナデ。輪轆み後。外面赤彩。	長石・雲母 赤色 普通	P52 30% PL12 竈内
		E (11.7)				
14	高土師器 杯	A 19.6	胴部一部欠損。胴部はラッパ状に開く。胴部で大きく開く。杯部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	胴部外面下位へラナデ。内面ナデ。内口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。	長石・雲母 に多い橙褐色 普通	P51 90% PL1 覆土中
		B 18.2				
		D 13.8				
		E 13.1				

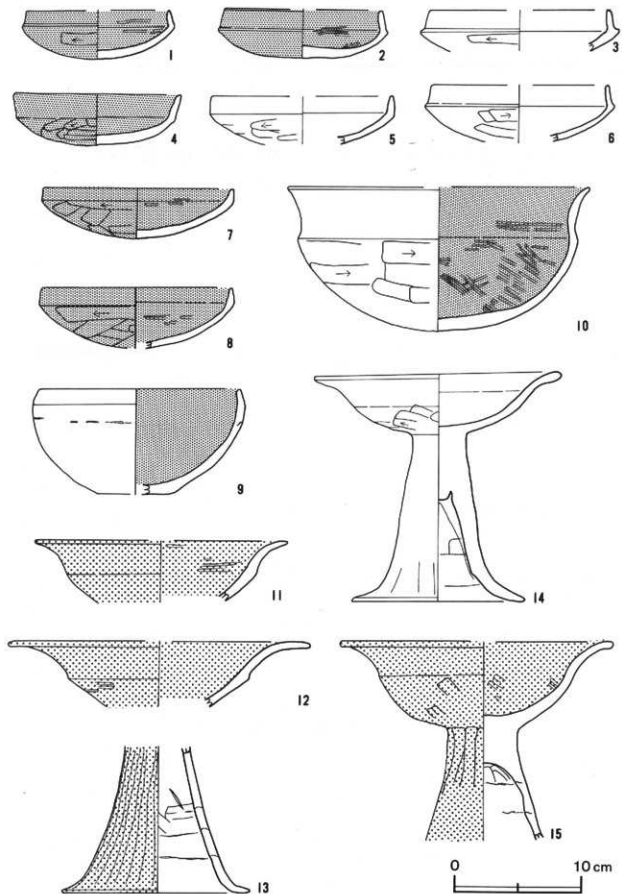


第15图 第11号住居跡実測图(1)

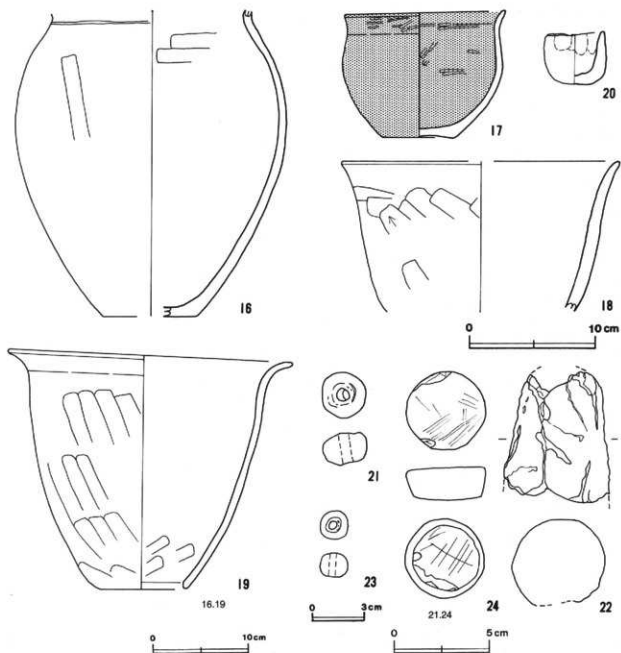


第16図 第11号住居跡実測図(2)

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17回 15	高土師器 環脚器	A [21.6] B (13.8) E (6.0)	胴部から環部片。脚部はラッパ状に開く。耳部は内側して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。内面指ナデ。体部内・外面、脚部外面赤粉。	石英・雲母 赤色 普通	P30 50% PL12 覆土中
第18回 16	土師器 甗	B (32.4) C [9.8]	底部から頸部片。平底。体部は内側して立ち上がり、頸部はわずかに外反する。	体部外面ヘラ削り。内面ナデ。	長石・雲母 にぶい赤褐色 やや不良	P55 50% 覆土中
17	土師器 甗	A 12.8 B 10.0 C 5.5	体部一部欠損。平底。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。体部外面ヘラ削り。内・外面黒色処理。	炭石・ハミス 黒褐色 やや不良	P33 80% PL12 床面
18	土師器 甗	A [22.0] B (11.9)	体部から1縁部片。体部は内側気味に立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P54 20% 覆土中
19	土師器 甗	A 29.7 B 24.1 C 9.5	無蓋式。体部は内側して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	長石・石英・ハミス にぶい褐色 普通	P36 90% PL12 覆土中
20	土師器 甗	A 4.5 B 4.2	口縁部一部欠損。丸底。体部は直線的に立ち上がり、1縁部に至る。	体部内・外面ナデ。内面横磨。	長石 にぶい褐色 普通	P57 90% PL11 覆土中



第17图 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第18図 第11号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考		
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		DP5	100%	PL17
第18図21	土 玉	2.2	1.7	0.6	9.2	覆土中			

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考		
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		DP6	50%	PL17
22	支 脚	10.4	8.3	(357.3)	床面			

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考		
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			Q2	100%	PL18
23	白 玉	0.7	0.6	0.2	0.3	粘板岩	覆土中			

図版番号	器種	計測値			材質	出土地点	集 考
		径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第18図24	不器石製品	4.1	1.7	31.5	滑石	覆土中	Q3 PL18

第12号住居跡(第19図)

位置 調査区の南部, J 4g9区。

規模と平面形 長軸5.50m, 短軸5.25mの方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 壁高は6~46cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅16~29cm, 下幅5~9cm, 深さ7~10cmで, 断面形はU字状である。

床 平坦で, 中央部と南壁付近が部分的に踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は, 長径38~47cm, 短径36~41cmの楕円形, 深さ52~70cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径44cm, 短径36cmの楕円形, 深さ19cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部やや東寄りに, 砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落し, 東袖部が攪乱を受け残存している部分は少ない。規模は, 煙道部から焚き口部まで97cm, 両袖最大幅99cm, 壁外への掘り込みは30cmである。火床部は, 床面を5cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

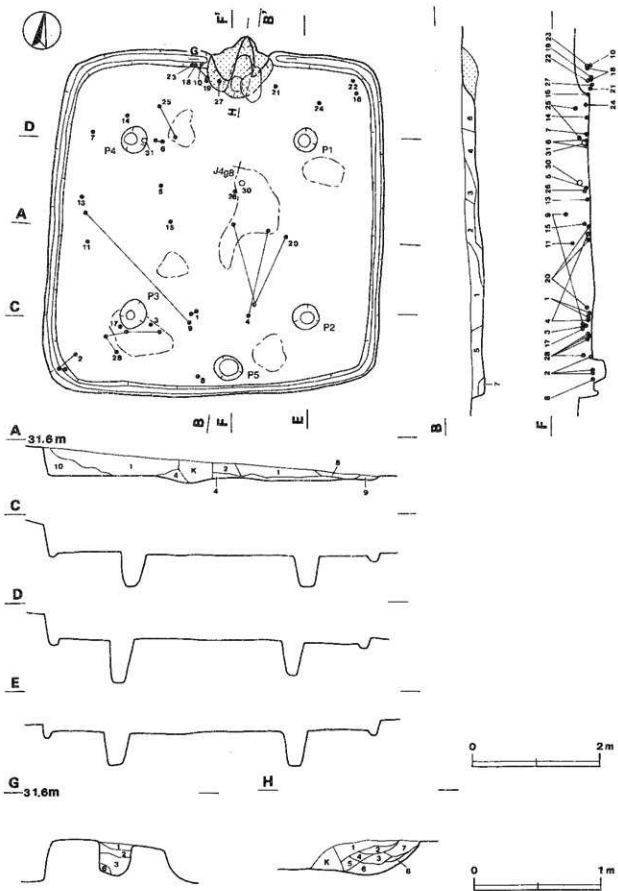
- 1 暗褐色 褐色 焼土粒子, 炭化物, 炭化粒子, ローム粒子, 焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土中・小ブロック, 焼土粒, 炭化物, 炭化粒子, ローム粒子, 焼土粒子, 灰燼
- 3 暗褐色 焼土小ブロック, 焼土粒, 焼土粒子, 炭化物, 炭化粒子, 焼土中ブロック, 炭化物, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒, 炭化粒子, ローム小ブロック, ローム粒子, 焼土粒子微量
- 5 暗褐色 焼土粒子, 炭化粒子, ローム小ブロック, ローム粒子, 焼土粒子微量
- 6 にぶい赤褐色 焼土粒, 焼土粒子少量, 焼土中・小ブロック, 炭化粒子, ローム粒子, 炭化物
- 7 赤黒色 ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック, 焼土粒子, 炭化物, 焼土粒子微量
- 8 暗褐色 焼土小ブロック, 焼土粒子少量, 焼土粒子, ローム小ブロック微量

覆土 10層からなり, ロームブロックの含有が多いことから人為堆積と考えられる。

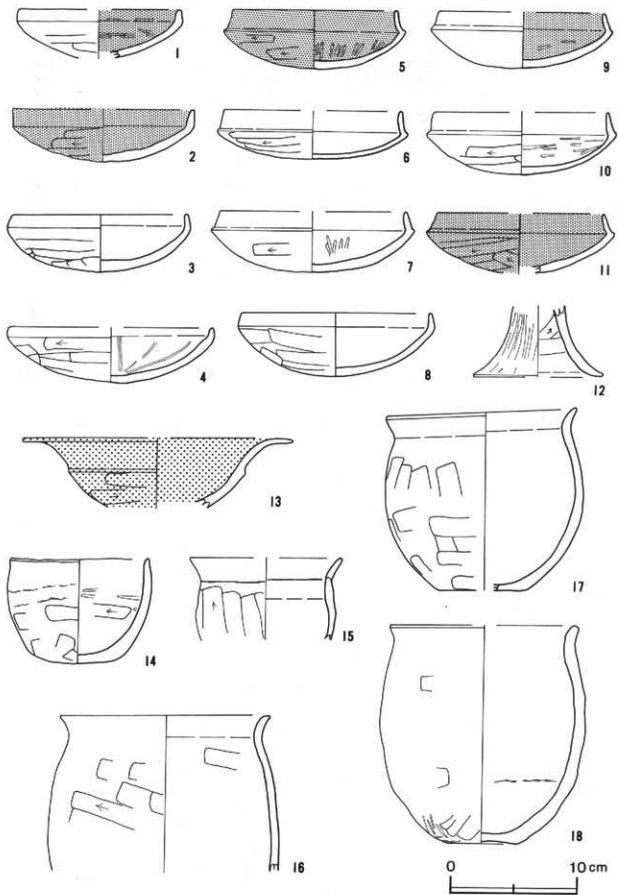
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック, ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック少量, ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック, ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック, ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック, ローム粒子少量, 焼土粒, ローム大・中ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土小ブロック, ローム中・小ブロック, 焼土粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
- 8 暗褐色 焼土小ブロック, ローム小ブロック, ローム粒微量
- 9 暗褐色 ローム粒少量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック, ローム粒子少量, ローム中ブロック微量

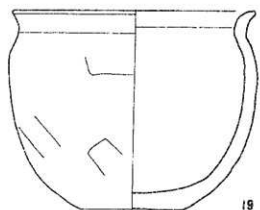
遺物 土師器片1707点(坏片295点, 高坏片38点, 鉢片1点, 甕片1373点), 須恵器片3点(甕片3点), 土製品3点, 混入とみられる縄文土器片2点, 弥生土器片10点が出土している。第20~22図覆土上層では, 11の土師器坏が西壁付近から, 3の土師器坏が中央部南側から, 25の土師器甕が中央部北西側から, 17の土師器甕が中央部南西側から横位で, 30の上玉が中央部から出土している。覆土下層では, 1の土師器坏が中央部南側から, 6の土師器坏が中央部北西側から, 5の土師器坏が中央部から正位で, 13の土師器高坏が西壁付近から, 15の土師器甕が中央部から, 16の土師器甕が北東コーナー部から逆位で, 23の土師器甕が竈付近から逆位で, 22の土師器甕が北東コーナー部付近から横位で, 24の土師器甕が中央部北東側から横位で, 26の土師器甕が中央部から, 31の土製紡錘車が中央部北西側から出土している。床面では, 7の土師器坏が西壁付近から正位で,



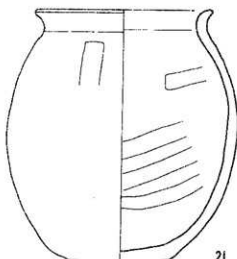
第19图 第12号住居跡実測图



第20图 第12号住居跡出土遺物実測図(1)



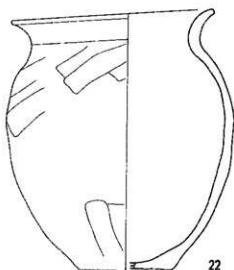
19



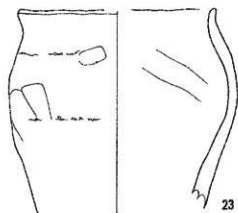
21



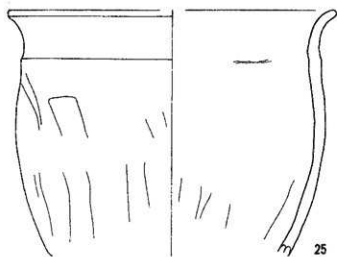
20



22



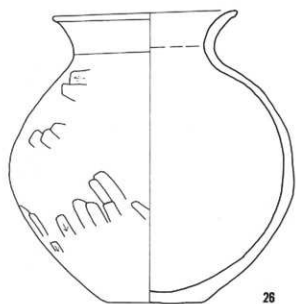
23



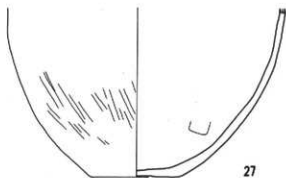
25



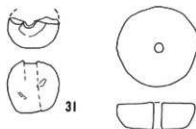
第21图 第12号住居跡出土遺物実測図(2)



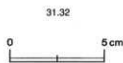
26



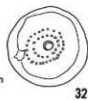
27



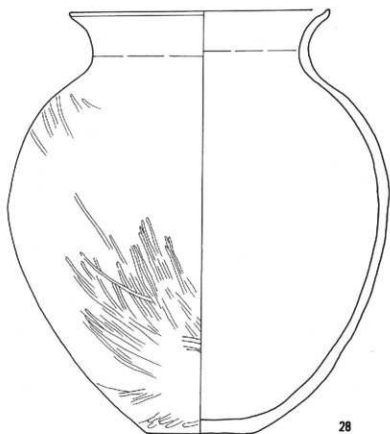
31



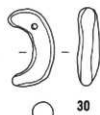
31.32



32



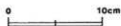
28



30



29



第22图 第12号住居跡出土遺物実測図(3)

10の土師器坏が甕付近から正位で、8の土師器坏が南壁付近から正位で、14の土師器鉢が中央部北西側から斜位で、21の土師器甕が甕東袖部付近から、18、19、27の上師器甕が甕西袖部付近から出土している。2の土師器坏は、南西コーナー部の床面と覆上下層から出土した破片が接合している。4の上師器坏は、中央部と中央部南側の覆土下層から出土した破片が接合している。9の上師器坏は、西壁付近と中央部南側の覆土上層から出土した破片が接合している。20の土師器甕は、中央部南側の覆土上層と中央部の覆土下層から出土した破片が接合している。28の上師器甕は、中央部南側と中央部南西側の覆土上層から出土した破片が接合している。12の土師器高坏、32の上製勾玉は覆土中から出土している。29は須恵器施の頸部から口縁部片で、頸部に縦区画の刺突文が、口縁部に縦位の沈線がそれぞれ施され、その間を水平方向に2段の沈線が施されている。

所見 覆土中層から下層にかけて大量の上器片が確認され、投棄された可能性がある。土師器坏の形状から、本跡の時期は6世紀後葉と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	別冊値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20回 1	坏 上師器	A [12.8] B (3.8)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直く直立する。	口縁部内・外側縁ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	石英・雲母・パミスにぶい褐色普通	P61 40% PL12 覆土中
2	坏 土師器	A [14.4] B 4.1	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直く直立する。	口縁部内・外側縁ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリアにぶい褐色普通	P56 30% 床面・覆土中
3	坏 上師器	A 13.8 B 4.5	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、へラナデ、内面ナデ。	長石・雲母・灰青土にぶい褐色普通	P61 70% PL13
4	坏 上師器	A [16.4] B (4.4)	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。	長石・石英・雲母にぶい褐色普通	P60 40% PL12 覆土中 二次焼成
5	坏 土師器	A 13.0 B 4.6	体部及び口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外側縁ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	長石・雲母にぶい赤褐色普通	P67 90% PL12 覆土中
6	坏 土師器	A [14.0] B 3.8	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリアにぶい褐色普通	P62 45% 覆土中
7	坏 土師器	A [14.8] B 4.8	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面へラ磨き。	長石・石英・雲母・スコリアにぶい褐色普通	P63 40% PL12 床面
8	坏 上師器	A 15.0 B 5.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリアにぶい褐色普通	P68 80% PL12 床面 二次焼成
9	坏 上師器	A [13.2] B 4.4	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面へラ磨き。内面黒色処理。	長石・石英・雲母にぶい褐色普通	P65 65% PL13 覆土中 二次焼成
10	坏 土師器	A [13.8] B 5.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。	長石・石英・雲母にぶい黄褐色普通	P64 50% PL12 床面 二次焼成
11	坏 土師器	A [13.2] B (4.8)	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリアにぶい褐色普通	P69 40% PL12 覆土中

図版番号	器種	目録頁(図)	器形の特徴	予法の特徴		胎土・色調・地紋	備考
第20図	高土師器	B (5.6)	胴部片。胴部はラッパ状に開く。	胴部外西縁段のヘラナデ、内面ヘラナデ。	長石・石英・スコリア 明黄褐色 普通	P10 20% 覆土中	
		D [10.4]					
13	高土師器	A [21.4]	坏部片。体部は内彎気味に立ち上がり、I線部との境に後をつ。I線部は外反する。	I線部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり後、ナデ、内面ナデ。内・外両面赤。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P69 20% 覆土中	
		B (5.3)					
14	土師器	A 11.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は厚く外反する。	I線部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり後、ナデ、内面ヘラナゲり。輪痕み残。	灰青・パミス にぶい褐色 普通	P71 95% PL12 床面	
		B 8.3					
		C 6.4					
15	土師器	A [12.0]	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、I線部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり、内面ヘラナゲ。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P72 20% 覆土中	
		B (6.5)					
16	土師器	A 16.6	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり、内面ナデ。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P74 45% PL11 覆土中	
		B (12.2)					
17	土師器	A 15.1	底部からI線部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	I線部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり、内面ナデ。	長石・パミス にぶい赤褐色 普通	P80 80% PL13 覆土中	
		B 14.4					
		C [7.0]					
18	土師器	A [15.0]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり、内面ナデ。輪痕み残。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P78 50% PL13 蓋内	
		B 17.3					
		C 5.6					
第21図	土師器	A 19.2	I線部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、I線部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり後、ナデ、内面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P83 95% PL13 蓋内	
		B 15.9					
		C 8.1					
20	土師器	A [13.2]	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	I線部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナゲ。器面荒れ。	長石・石英・雲母 褐色 覆土中	P73 20% 覆土中	
		B (11.7)					
21	土師器	A 14.2	底部からI線部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	I線部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり、内面ヘラナゲ。器面荒れ。	石英・雲母 褐色 普通	P82 80% PL13 床面	
		B 20.1					
		C 8.0					
22	土師器	A 16.7	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、I線部は外反する。	I線部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり、内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P79 50% PL13 覆土中	
		B 20.7					
23	土師器	A [15.7]	体部からI線部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	I線部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり後、ナデ、内面ヘラナゲ。輪痕み残。	長石・雲母 にぶい赤褐色 やや不良	P75 10% PL13 覆土中	
		B (16.1)					
24	土師器	A 15.1	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり、内面ナデ。	長石・パミス にぶい赤褐色 普通	P81 50% PL13 覆土中	
		B 21.3					
25	土師器	A [26.0]	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、I線部との境に後をつ。I線部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり後、ナデ、内面ヘラナゲ。器面荒れ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P76 40% 覆土中	
		B (19.5)					
第22図	土師器	A 19.6	底部からI線部片。平底。体部は球形状で、I線部は外反する。	I線部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり後、ナデ、内面器面有縁。	長石・石英・雲母・スコリア・パミス 不具	P84 80% PL14 覆土中	
		B 30.7					
		C 10.5					
27	土師器	B (18.0)	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり、内面ヘラナゲ。	長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P77 45% PL13 蓋内	
		C 9.7					
28	土師器	A 29.7	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、I線部は外反する。蓋部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナゲり、内面ナデ。底荒れナゲ。	長石・石英・パミス にぶい褐色 普通	P85 80% PL14 覆土中	
		B 24.1					
		C 9.5					

図版番号	器種	計測値					出土地点	備考		
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(g)	重量(g)				
第22図30	七葉写玉	3.0	1.9	0.9	0.2	3.9	覆土中	DP7	100%	PL17

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考		
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
31	土玉	(2.8)	2.7	0.2	(11.3)	覆土中	DP8	50%	PL17
32	土製粘押草	4.3	1.4	0.4	30.5	覆土中	DP9	95%	PL17

第13号住居跡（第23・24図）

位置 調査区の南部，J4f0区。

規模と平面形 一辺5.10mほどの方形である。

主軸方向 N-9°-W

壁 壁高は23~66cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅18~28cm，下幅4~11cm，深さ4~10cmで，断面形はU字状である。

床 平坦で，竈の前面及び南壁下，西壁下の一部が踏み固められている。

ピット 5か所（P1~P5）。P1~P4は，長径52~65cm，短径36~52cmの楕円形，深さ61~70cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径45cm，短径37cmの円形，深さ21cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に，砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，両袖部が残存している。規模は，煙道部から焚き口部まで111cm，両袖最大幅125cm，壁外への掘り込みは36cmである。火床部は，床面を3cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック，ローム粒子少量，焼土中ブロック，焼土粒子，ローム中ブロック微量
- 2 に近い赤褐色 焼土小ブロック，炭化物，ローム小ブロック，ローム粒子少量，焼土大ブロック，焼土粒子，粘土粒微量
- 3 赤褐色 焼土小ブロック，焼土粒子，粘土ブロック，粘土粒子中量
- 4 に近い赤褐色 粘土粒子中量，焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，ローム小ブロック微量
- 5 に近い灰褐色 粘土粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック，ローム粒子少量，炭化物微量
- 7 暗褐色 焼土粒子，炭化物，ローム小ブロック，粘土粒子微量

覆土 12層からなり，レンズ状の堆積を示し，自然堆積である。南西コーナー部壁下に焼土塊がみられる。

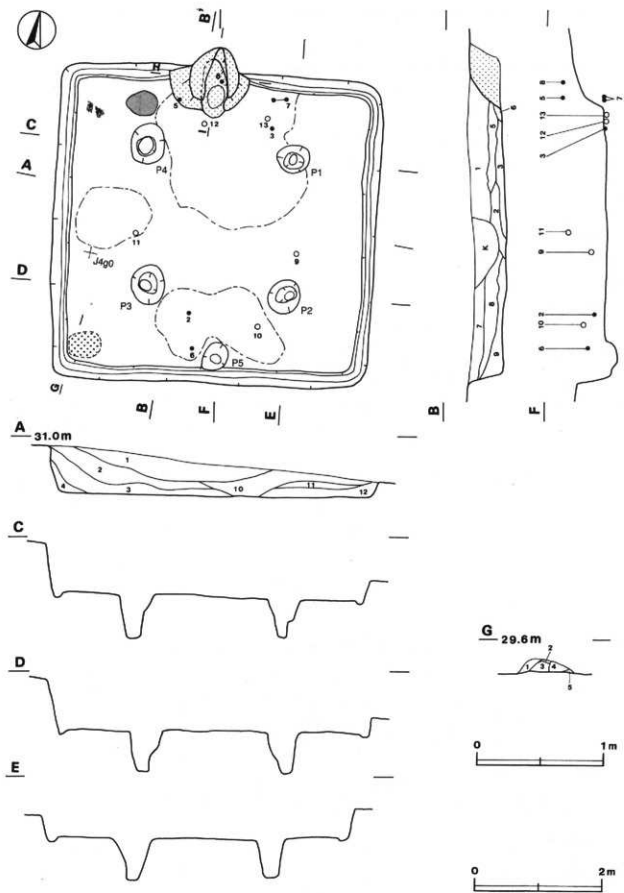
土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子少量，焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，ローム大・中・小ブロック，ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量，焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム大・中・小ブロック微量
- 3 暗褐色 炭化粒子少量，焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，ローム中・小ブロック，ローム粒子微量
- 4 褐色 炭化物，炭化粒子，ローム小ブロック，ローム粒子微量
- 5 暗褐色 炭化粒子少量，焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，ローム小ブロック，ローム粒子微量
- 6 暗褐色 焼土大・小ブロック，焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム小ブロック，ローム粒子，粘土粒微量
- 7 暗褐色 焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム中・小ブロック，ローム粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子少量，炭化物，炭化粒子，ローム中・小ブロック微量
- 9 暗褐色 焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム中・小ブロック，ローム粒子微量
- 10 暗褐色 炭化粒子少量，焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，ローム中・小ブロック，ローム粒子微量
- 11 暗褐色 ローム中ブロック少量，炭化物，炭化粒子，ローム小ブロック，ローム粒子微量
- 12 暗褐色 焼土中・小ブロック，焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム中・小ブロック，ローム粒子微量

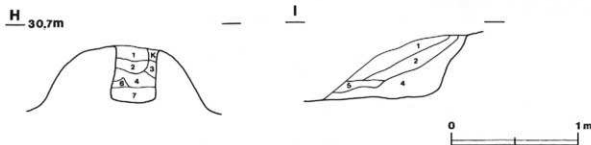
焼土塊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック，焼土粒子，ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 4 赤褐色 焼土小ブロック，焼土粒多量，ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック，ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物 土師器片588点（坏片152点，高坏片25点，鉢片2点，壺片408点，甗片1点），土製品5点，混入とみ

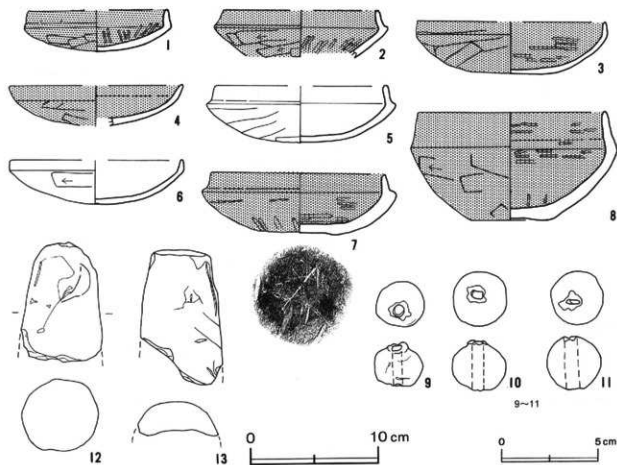


第23图 第13号住居跡実測图(1)



第24図 第13号住居跡実測図(2)

られる弥生土器片15点が出土している。覆土上層では、第25図10の土玉が中央部南側から、11の土玉が中央部西側から出土している。覆土中層では、2の土師器坏が中央部南側から、6の土師器坏が南壁付近から正位で、9の土玉が中央部東側から出土している。床面では、3の土師器坏が竈付近から正位で、7の土師器坏が北東壁付近から、13の支脚が北東部から、12の支脚が竈の南側から出土している。竈内では、5の土師器坏が西袖部付近から、8の土師器坏が覆土中から正位で出土している。1、4の土師器坏は、覆土中から出土している。所見 本跡の時期は、遺構の形態及び土師器坏の形状から6世紀後葉と考えられる。



第25図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	土師器	A [10.9]	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎気味に立ち上がり、口縁部との境 に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ割り筋、ナデ、内面放射状のヘラ 筋き。内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P88 40% PL11 覆土中 二次焼成
		B 3.2				
2	土師器	A [12.0]	体部から口縁部片。体部は内彎気味 に立ち上がり、口縁部との境に明瞭 な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ割り筋、内面ヘラ筋き。内・外面黒 色処理。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P86 20% 覆土中 二次焼成
		B (3.7)				
3	土師器	A [15.0]	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部は短く直 立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ割り筋、ナデ、内面ヘラ筋き。内・ 外面黒色処理。	雲母・スコリア 褐色 普通	P89 43% PL14 未測
		B 4.1				
4	土師器	A [13.8]	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ割り筋、内面ナデ。内・外面黒色処 理。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P87 20% 覆土中 二次焼成
		B (3.1)				
5	土師器	A [13.4]	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部との境に 明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ割り筋、内面ナデ。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P90 60% 覆土中 二次焼成
		H 4.4				
6	土師器	A [13.6]	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部は短く直 立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ割り筋、ナデ、内面ナデ。	長石・雲母 褐色 普通	P91 70% 覆土中 二次焼成
		B 3.5				
7	土師器	A 13.6	底部から口縁部片。平底。体部は内 彎気味に立ち上がり、口縁部との境 に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾す る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ割り筋、ヘラ筋き、内面ヘラ筋き。 内・外面黒色処理。	長石・スコリア・バ ミス にぶい褐色 普通	P92 85% PL14 床面
		B 4.8				
8	土師器	A 14.8	底部から口縁部片。平底。体部は内 彎気味に立ち上がり、口縁部は内傾 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ割り筋、内面ナデ。内・外面黒色処 理。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P93 80% PL14 覆土中 二次焼成
		B 8.5				
		C 6.0				

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
9	土玉	2.8	6.8	0.6	19.5	覆土中	DP10 100% PL17
10	土玉	2.7	2.8	0.7	21.1	覆土中	DP11 100% PL17
11	土玉	2.5	2.3	0.6	11.3	覆土中	DP12 100% PL17

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		
12	支脚	(9.4)	(6.5)	(311.8)	床面	DP11 50%
13	支脚	(10.5)	(6.5)	(174.5)	床面	DP13 40% PL17

第14号住居跡 (第26図)

位置 調査区の東部、J 5b1区。

規模と平面形 長軸2.53m、短軸2.32mのほぼ方形である。

主軸方向 N-97°-W

壁 壁高は38~53cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部北側と南側がわずかに踏み固められている。

竈 西壁中央部やや南寄りに、砂混じりの褐色粘土で構築されている。両袖部は削平され、残存している部分は少ない。規模は、煙道部から焚き口部まで106cm、両袖最大幅 [94] cm、壁外への掘り込みは30cmである。火床部は、火熱を受けて赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。

覆土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒少量、焼土小ブロック、ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 焼土粒少量、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、焼土中ブロック、ローム中ブロック微量
- 4 濃い褐色 粘土粒少量、焼土小ブロック、炭化粒子、ローム粒少量
- 5 灰褐色 粘土粒中量、焼土粒少量
- 6 赤褐色 焼土小ブロック、ローム小ブロック少量、焼土中ブロック、焼土粒少量
- 7 暗褐色 焼土粒少量、焼土小ブロック、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 8 褐色 ローム小ブロック、ローム粒少量、粘土粒少量、焼土小ブロック微量
- 9 灰褐色 ローム小ブロック、ローム粒中量、ローム中ブロック少量
- 10 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒少量、ローム大ブロック微量

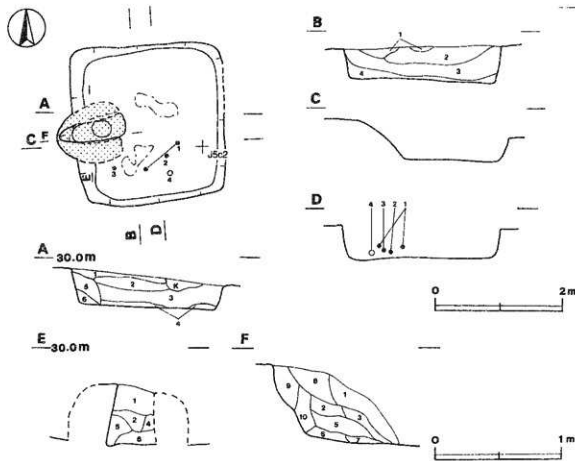
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

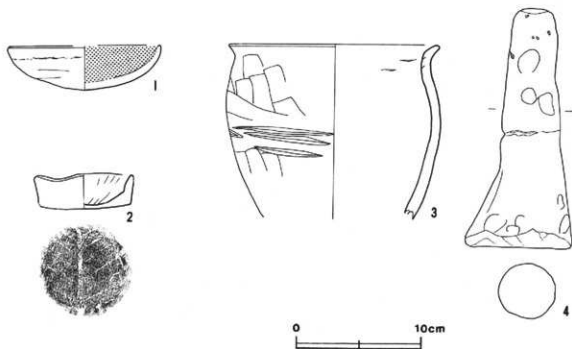
- 1 暗褐色 ローム粒少量、焼土小ブロック、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック、炭化材、ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック少量
- 5 灰褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック、粘土粒微量
- 6 褐色 粘土小ブロック少量、焼土中・小ブロック微量

遺物 土師器片106点(坏片23点、薬片83点)、須恵器片1点(坏片1点)、土製品1点が出土している。覆土下層では、第27図2の土師器手捏土器が中央部から逆位で、3の土師器薬が中央部南西側から逆位で、4の支脚が中央部南側から出土している。1の土師器坏は、中央部東側と中央部南側の覆土中層から出土した破片が接合している。

所見 本跡の時期は、出土遺物が少なく限定することは困難であるが、第27図1、2の土師器坏と土器片の形状から6世紀後半と考えられる。



第26図 第14号住居跡実測図



第27図 第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	坏 上 部 器	A [12.0] B 3.5	底部から口縁部片。丸底。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナア。体部外面へ ラ削り、内面へラ磨き。内面黒色焼 理。輪積み底。	長石・石英・パミス にふい・橙色 普通	P84 60% PL14 覆土中
2	手捏土器 上 部 器	A 7.8 B 2.7 C 7.0	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾 して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナア。底部 本葉痕。	長石・雲母 にふい・橙色 普通	P65 95% PL14 覆土中
3	堊 土 器	A 16.4 B (13.8)	底部から口縁部片。体部は内彎して 立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナア。体部外面へ ラ削り、内面ナア。体部掌形痕。輪 積み底。	長石・石英・雲母・ スコリア・パミス 普通	P66 70% PL14 覆土中

図版番号	器種	計 測 値			出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		
4	支 脚	19.0	8.5	696.9	覆土中	DP15 90% PL17

第15号住居跡 (第28図)

位置 調査区の南東部、J 4 i0区。

重複関係 本跡は、第2号堀に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.05m、短軸(4.20)mで方形と推定される。南側は調査区域外に延びている。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は13~35cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第2号堀に掘り込まれた西壁下と、北壁下の一部を除いて巡っている。上幅18~43cm、下幅6~18cm、深さ6~7cmで、断面形はU字状である。

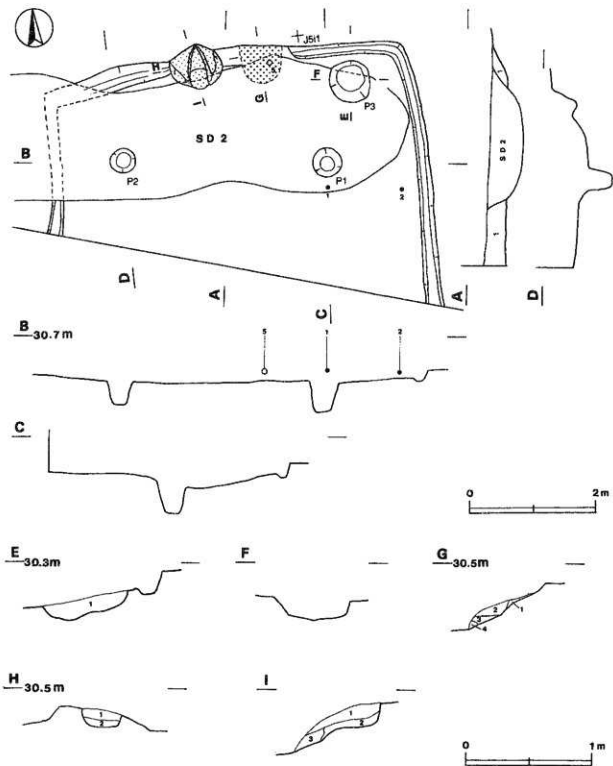
床 平坦で、踏み固められた部分はほとんどみられない。

ピット 3か所 (P1~P3)。P1~P2は、径38~46cmの円形、深さ38~65cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P3は長径67cm、短径60cmの楕円形、深さ27cmであり、北東コーナー付近に掘り込まれている。位置と土層の含有物から竈に関連するピットと思われる。

P3土層解説

1 極暗赤褐色 焼土粒子少量、焼上中・小ブロック、ローム中・小ブロック、ローム粒子、粘土粒子飛沫

竈 北壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落している。両袖部の南側及び火床部



第28図 第15号住居跡実測図

のほとんどが第2号堀に掘り込まれている。規模は、煙道部から火床部まで(38)cm, 両袖最大幅83cm, 壁外への掘り込みは15cmである。残存する火床部に赤変した部分は見られない。煙道部は外傾して立ち上がる。

覆土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック, ローム大・中ブロック微量
- 2 極暗赤褐色 焼土小ブロック少量, 焼土大ブロック, 焼土粒子, ローム大・中・小ブロック, 粘土粒子微量
- 3 極暗赤褐色 焼土中・小ブロック, 焼土粒子, ローム大・中ブロック, ローム粒子微量

覆土 単一層であり, ロームブロックの含有が多く, 人為堆積と考えられる。竈東側に焼土塊がみられる。

土層解説

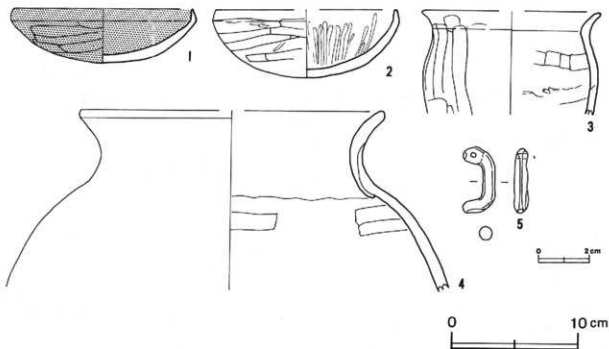
- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック少量

焼土塊土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
- 2 極暗赤褐色 ローム大・中・小ブロック少量, 焼土小ブロック, 焼土粒子, 粘土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック, ローム粒子少量, 焼土粒子微量

遺物 土師器片13点(坏片3点, 甕片10点), 土製品1点が出土している。覆土上層では, 第29図1の土師器坏が中央部東側から正位で, 5の土製勾玉が北壁際から出土している。覆土下層では, 2の土師器坏が東壁際から逆位で出土している。3, 4の土師器甕は, 覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第29図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	坏	A 14.3	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り, 内面ナデ。内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア 明赤褐色	P97 95% PL14 覆土中
	土師器	B 4.3				
2	坏	A [14.1]	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後, へラ磨き, 内面放射状のへラ磨き。	長石・石英・雲母・バミヌ 明赤褐色	P98 60% PL14 覆土中
	土師器	B 5.3				
3	甕	A [13.8]	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のへラ削り, 内面へラナデ。輪轆み痕。	長石・石英・雲母・バミヌ 明赤褐色	P99 16% 覆土中
	土師器	B (8.3)				
4	甕	A [24.0]	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ, 内面へラナデ。輪轆み痕。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色	P100 10% 覆土中
	土師器	B (14.1)				

図版番号	器種	計測値					出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第29図5	上葉勾玉	2.6	1.3	0.5	0.1	1.3	覆土中	D P 16	100% PL 17

第16号住居跡（第30図）

位置 調査区の南西部，J 4 e3区。

規模と平面形 長軸8.72m，短軸7.20mの長方形である。

主軸方向 N-14°-W

壁 壁高は10～30cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下の一部を除いて巡っている。上幅22～33cm，下幅4～18cm，深さ7～15cmで，断面形はU字状である。

床 平坦で，中央部は踏み固められている。

ピット 8か所（P1～P8）。P1～P4は，長径57～80cm，短径55～62cmの楕円形，深さ62～83cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は径47cmの円形，深さ56cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は長径59cm，短径41cmの楕円形，深さ30cmである。位置から，P5の補助柱穴と考えられる。P7は径55cmの円形，深さ69cm，P8は長径63cm，短径56cm，深さ95cmである。位置から補助柱穴の可能性がある。

竈 北壁中央部に，砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，両袖部が残存している。規模は，煙道部から焚き口部まで126cm，両袖最大幅175cm，壁外への掘り込みは18cmである。火床部は，床面をわずかに掘りくぼめており，火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

電土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量，焼土小ブロック，炭化物，炭化粒子，ローム小ブロック，ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土中・小ブロック，焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム小ブロック，ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 ローム小ブロック，ローム粒子少量，炭化物，炭化粒子，ローム中ブロック微量
- 4 雑形赤褐色 焼土粒子少量，炭化粒子，軟土粒子，炭微炭
- 5 褐色 ローム大ブロック多量

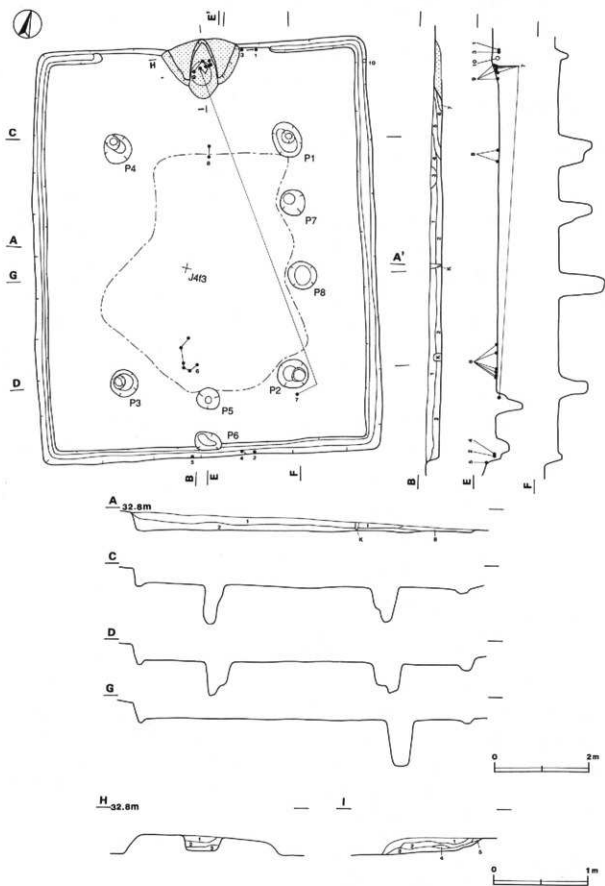
覆土 8層からなり，レンズ状の堆積を示し，自然堆積である。

土層解説

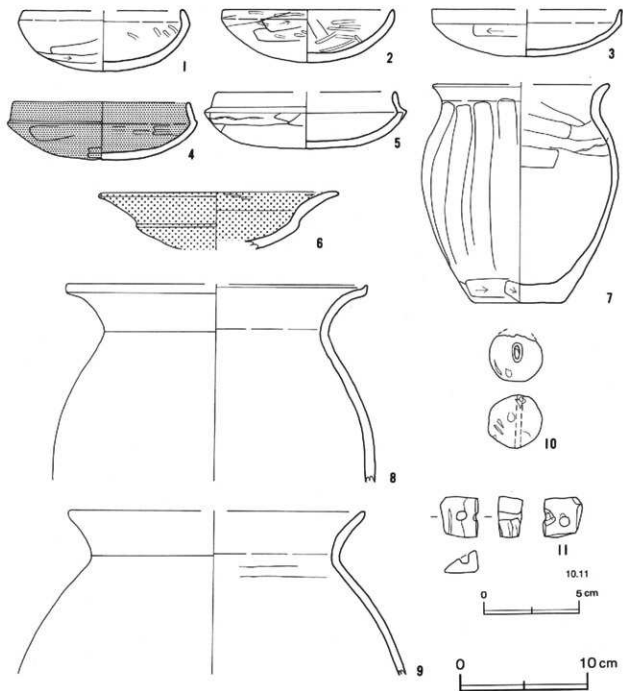
- 1 暗褐色 焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム中・小ブロック，ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量，焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム中・小ブロック微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック，炭化粒子，ローム中・小ブロック，ローム粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム中・小ブロック，ローム粒子微量
- 5 にぶい褐色 ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子，ローム中・小ブロック，焼土粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子少量，焼土小ブロック，焼土粒子，炭化物，炭化粒子，ローム大・中・小ブロック，軟土粒子微量
- 7 にぶい褐色 ローム粒子少量，炭化粒子，ローム中・小ブロック，軟土粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子，ローム中・小ブロック微量

遺物 土師器片465点（坏片127点，高坏片17点，甕片321点），須恵器片1点（坏片1点），土製品8点，鉄滓105.0g，混入とみられる縄文土器片2点，弥生土器片67点が出土している。覆土上層では，第31図5の土師器坏が南壁下から出土している。覆土下層では，2，4の土師器坏が南壁下から，10の土玉が北東コーナー部から出土している。床面では，3の土師器坏が北壁下から，1の土師器坏が北壁際から，6の土師器高坏が中央部南側から，8の土師器甕が中央部北側から出土している。竈内からは，9の土師器甕が覆土中から出土している。7の土師器甕は，竈内の覆土中と中央部南東側の床面から出土した破片が接合している。11の不明石製品は，覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第30图 第16号住居跡実測图



第31図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	坏 土 脚 部	A [12.6] B 4.8	底部から口縁部片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り肌、ナデ、内面へラ磨き。	長石・石英・バミス に赤い黄褐色 普通	P103 80% PL15 扉面
2	坏 土 脚 部	A 13.4 B 4.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り肌、へラ磨き、内面へラ磨き。	長石・石英・白色針 状物 に赤い褐色 普通	P105 95% PL15 覆土中 二次焼成
3	坏 土 脚 部	A [15.0] B 3.7	底部から口縁部片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母 に赤い褐色 普通	P102 40% 扉面

図版番号	器種	計測値(cm)	容 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色楽・焼成	備 考
第 31 図	土 坏 器	A 13.8 B 4.3	高径から口縁部片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面黄ナデ。体部外面へウ張り稜、ナデ。内面へウ張り。内・外面黒色地塗。	長石・石英・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P101 60% PL15 表土中
3	土 坏 器	A [14.1] B 4.5	高径から口縁部片。丸底。体部は内脣気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面黄ナデ。体部外面へウ張り稜、ナデ。内面へウ張り。	石英・雲母・ハミス 褐色 普通	P101 30% 表土中
6	高 土 坏 器	A 19.0 B (4.5)	坏部片。体部は内脣気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部外面黄ナデ。内面へウ張り。体部内・外面ナデ。内・外面赤赤。	石英・雲母 褐色 普通	P106 40% PL15 表土中
7	土 坏 器	A [14.0] B 17.3 C 7.0	高径から口縁部片。平底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面黄ナデ。体部外面へウ張り。内面へウ張り。底部へウ張り。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P109 60% PL15 表土・灰層
8	土 坏 器	A [23.8] B [15.5]	体部から口縁部片。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は外反する。胎部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面黄ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア に白い褐色 普通	P107 15% PL15 表土
9	土 坏 器	A [23.2] B [13.0]	体部から口縁部片。体部は内脣気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面黄ナデ。体部外面ナデ。内面へウ張り。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P108 10% 表土

図版番号	器種	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
10	土 玉	2.8	2.9	0.7	(15.5)	表土中	D P17 100% PL17

図版番号	器種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
11	不明器種	2.0	1.9	1.3	6.4	凝灰岩	表土中	Q4 PL18

第17号住居跡 (第32図)

位置 調査区の中央部、I 4 h9区。

重複関係 本跡は、第5号住居に掘り込まれている。

規模と平面形 一辺4.50mほどの方形である。

主軸方向 N-2°-E

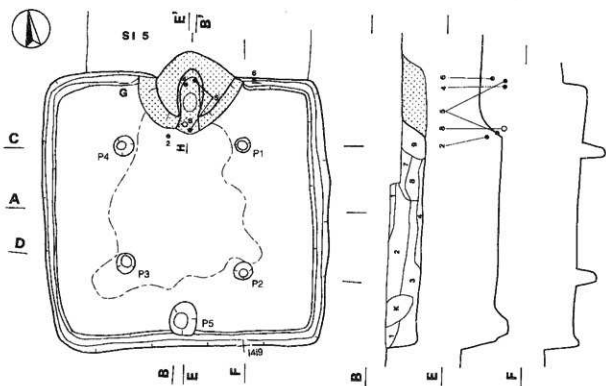
壁 壁高は36~52cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅13~33cm、下幅5~14cm、深さ4~7cmで、断面形はU字状である。

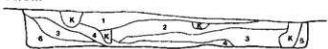
床 平坦で、竈前方から中央部にかけて踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は、径22~32cmの円形、深さ33~49cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径50cm、短径43cmの楕円形、深さ21cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部やや東寄りに、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部の上部が第5号住居を構築する際に削平されている。規模は、煙道部から焚き口部まで105cm、両袖最大幅164cm。竈外への掘り込みは15cmである。袖の内壁は、火熱を受けて赤変している。火床部は、床面をわずかに掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。



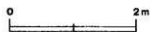
A 30.8m



C



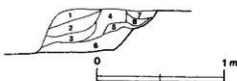
D



G 30.7m



H



第32图 第17号住居跡実測图

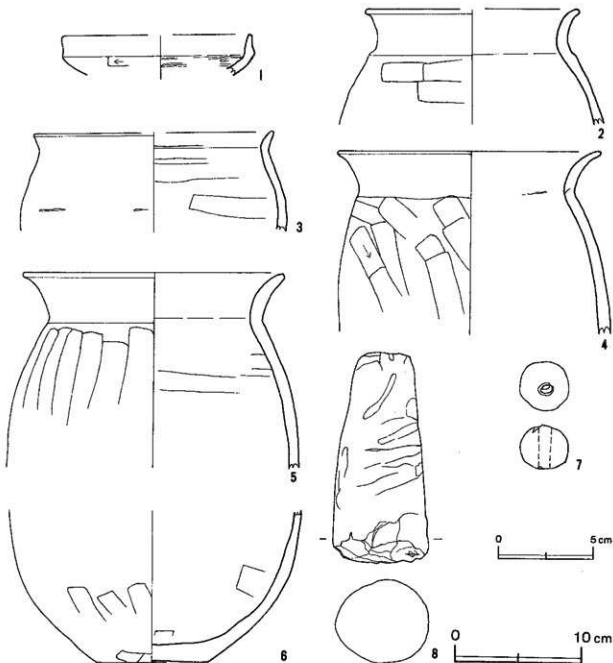
甌土層解説

- 1 にぶい小褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 2 褐色 焼土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 3 褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒少量、焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土大・中・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子少量
- 7 褐色 ローム粒少量、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック微量
- 8 赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子微量

覆土 9層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子、炭化材少量、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、焼土粒子、炭化物、炭化物、ローム中ブロック微量
- 4 黒褐色 炭化材中量、焼土中・小ブロック、炭化物、ローム小ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 7 灰褐色 粘土小ブロック中量、ローム小ブロック、ローム粒子少量、焼土小ブロック、粘土粒少量
- 8 灰褐色 焼土中ブロック、炭化物、ローム小ブロック、粘土中ブロック少量
- 9 灰褐色 ローム小ブロック、粘土小ブロック少量、焼土小ブロック微量



第33図 第17号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片236点(坏片46点, 碗片5点, 甕片185点), 須恵器片14点(坏片1点, 蓋片4点, 甕片8点, 甌片1点), 土製品2点, 混入とみられる縄文土器片4点, 弥生上器片12点が出土している。覆土上層では, 第33図2の土師器甕が中央部北側から出土している。覆土中層では, 6の土師器甕が北壁際から出土している。窠内では, 4, 5の土師器甕が覆土中から, 8の土製支脚が突き口部から出土している。1の土師器坏, 3の土師器甕, 7の土甕は覆土中から出土している。

所見 本跡は, 覆土上層に炭化材がみられることから焼失家屋と思われる。時期は, 遺構の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	坏 土師器	A [14.9] B (3.2)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き。	長石・石英・雲母にぶい橙褐色 普通	P110 10% 覆土中
2	甕 土師器	A [17.0] B (9.0)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に壁を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り, 内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリアにぶい橙褐色 普通	P12 10% 覆土中
3	甕 土師器	A [18.8] B (7.7)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ, 内面ヘラナデ。輪襷み肌。	雲母・バミスにぶい橙褐色 普通	P112 5% 覆土中
4	甕 土師器	A 20.8 B (14.4)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に壁を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り, 内面ナデ。輪襷み肌。	長石・石英・雲母にぶい橙褐色 普通	P114 70% PL15 窠内
5	甕 土師器	A 20.4 B (15.3)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に壁を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ。	長石・雲母にぶい橙褐色 普通	P113 50% PL15 窠内
6	甕 土師器	B (12.1) C 8.5	体部から体部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後, ナデ, 内面ヘラナデ。	石英・雲母にぶい橙褐色 普通	P13 40% 覆土中

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
7	土甕	2.6	2.3	0.6	14.1	覆土中	DP18 100% PL17

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		
8	支脚	16.8	7.4	(820.4)	窠内	DP19 PL17

第18号住居跡(第34図)

位置 調査区の南西部, J4h1区。

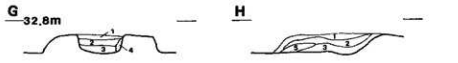
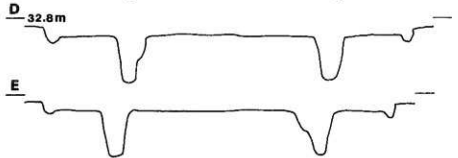
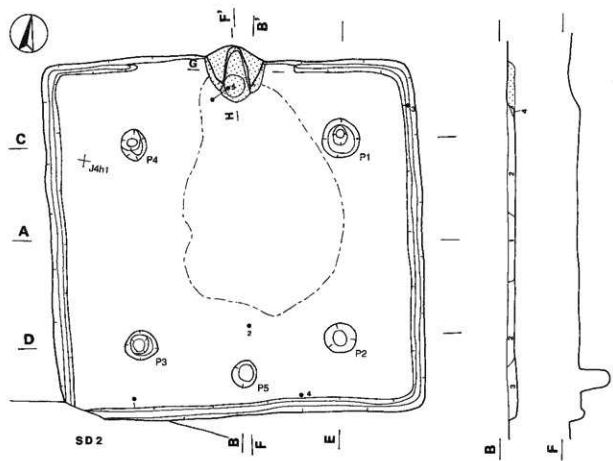
重複関係 本跡は, 第2号堀に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.88m, 短軸5.78mの方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 壁高は13~25cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下の一部と南西コーナー部の壁下を除いて巡っている。上幅16~26cm, 下幅3~11cm, 深さ5~8cmで, 断面形はU字状である。



第34图 第18号住居跡实测图

床 平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1~P4は、長径46~63cm、短径37~58cmの楕円形、深さ68~72cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径43cm、短径37cmの楕円形、深さ47cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで91cm、両袖最大幅92cm、壁外への掘り込みは21cmである。火床部は、床面をわずかに掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

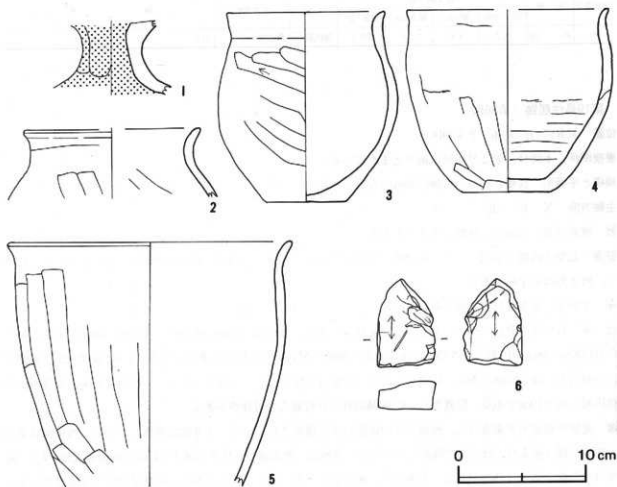
- 1 褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子、粘土粒子少量、焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、ローム粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック、炭化物、ローム粒子少量
- 5 赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、ローム粒子、粘土粒子少量、炭化物、ローム中ブロック微量

覆土 4層からなる、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、炭化粒子、ローム大・中ブロック微量
- 3 褐色 ローム小ブロック、ローム粒子中量、ローム大ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、焼土粒子、粘土粒子微量

遺物 土師器片371点 (坏片25点、壺片346点)、土製品1点、石製品1点が出土している。覆土下層では、第35図1の土師器高坏、4の土師器甕が南壁際から、2の土師器甕が中央部南側から、5の土師器甕が竈付近か



第35図 第18号住居跡出土遺物実測図

ら出土している。床面では、3の土師器甕が北東コーナー部付近から出土している。6の砥石が覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	高土師器	B (5.8)	胴部片。胴部はハの字状に開き、底部で大きく開く。	胴部外面ヘラ削り後、ナデ、内面ナデ。胴部横ナデ。内・外向赤彩。	長石・石英・雲母 褐色 普通	PL15 10% 覆土中
2	土師器	A 12.8 D (5.5)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	長石・雲母・バミス 明赤褐色 普通	PL15 10% 覆土中
3	土師器	A 12.3 H 15.0 C 6.2	口縁部一部欠損。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	PL17 90% PL15 床底
4	土師器	A 16.0 D 14.4 C 7.3	底部から口縁部片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ、内面ヘラナデ。底部二方向のヘラ削り。輪轆み製。	長石・石英・雲母・バミス 赤色 不良	PL18 65% PL15 覆土中
5	土師器	A 22.4 B (19.2)	体部から口縁部片。体部は緩やかに内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英・バミス にぶい褐色 普通	PL19 40% PL15 覆土中

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	砥石	6.9	4.6	2.3	91.3	凝灰岩	覆土中	Q5 PL18

第19号住居跡 (第36図)

位置 調査区の中央部、I 4 19区。

重複関係 本跡は、第2号住居に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.85m、短軸4.50mの方形である。

主軸方向 N-6°-E

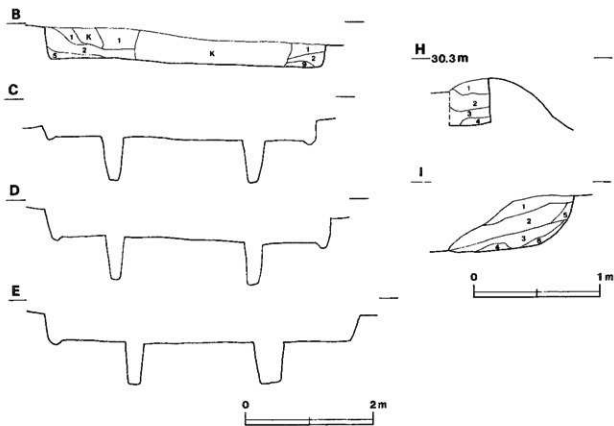
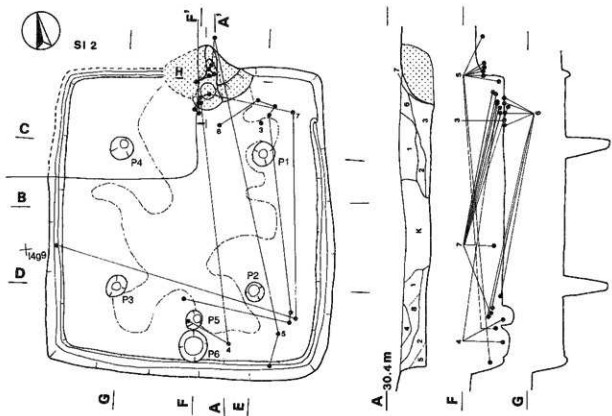
壁 壁高は32~45cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下西側と北東コーナー部の壁下を除いて巡っている。上幅13~29cm、下幅4~12cm、深さ6~12cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

ピット 6か所(P1~P6)。P1、P3は長径37~38cm、短径30~33cmの楕円形、深さ67~69cmである。P2、P4は径30~38cmの円形、深さ65~68cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径32cm、短径25cmの楕円形、深さ23cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は長径50cm、短径44cmの楕円形、深さ10cmである。位置から、P5の補助柱穴か貯蔵穴の可能性がある。

竈 北壁中央部やや東寄りに、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落している。西袖部は第2号住居に掘り込まれ、ほとんど残存していない。規模は、煙道部から焚き口部まで103cm、両袖最大幅(85)cm、壁外への掘り込みは43cmである。火床部は、床面をわずかに掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。



第36图 第19号住居跡実測图

電土層解説

- 1 灰褐色 粘土粒子多量, ローム小ブロック, ローム粒子少量, 焼土小ブロック, 焼土粒子微量
- 2 灰褐色 粘土粒子中量, 焼土小ブロック, 焼土粒子微量
- 3 褐色 焼土大・小ブロック, 焼土粒子, 粘土粒子少量, 炭化物微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 5 灰褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子, 炭化物, 粘土粒子微量
- 6 灰褐色 ローム小ブロック中量, 粘土粒子少量

覆土 9層からなり, レンズ状の堆積を示し, 自然堆積である。

土層解説

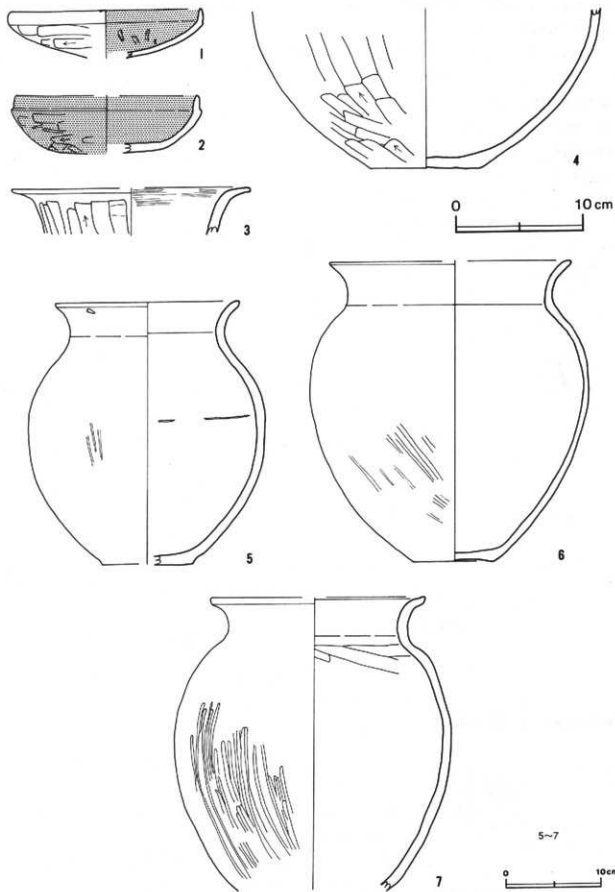
- 1 暗褐色 ローム大・中・小ブロック少量, 焼土粒子, 粘土小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック, ローム粒子少量, ローム大・中ブロック, 粘土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック, ローム中ブロック, 粘土小ブロック, 粘土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック微量
- 5 褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子, 炭化粒子, ローム粒子, 粘土粒子微量
- 7 暗褐色 粘土粒子多量, ローム小ブロック, ローム粒子少量, 焼土粒子, 炭化粒子微量
- 8 暗褐色 炭化物, ローム中・小ブロック, ローム粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土小ブロック, 焼土粒子, ローム小ブロック, ローム粒子少量, ローム大ブロック微量

遺物 土師器片369点(坏片31点, 高台付坏片2点, 高坏片29点, 甕片307点), 混入とみられる縄文土器片4点, 弥生土器片1点, 陶器片2点が出土している。床面では, 第37図3の土師器甕が竈東袖部付近から出土している。4の土師器甕は, 中央部南側の床面と甕付近の覆土中層から出土した破片が接合している。7の土師器甕は, 甕付近の床面及び西隣際と南東コーナー部付近の覆土中層から出土した破片が接合したものである。5の土師器甕は, 南東コーナー部の覆土中層と甕内覆土中から出土した破片が接合したものである。6の土師器甕は, 甕付近と中央部南側の床面及び南東コーナー部付近の覆土中層から出土した破片が接合したものである。1, 2の土師器坏が覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は, 第2号住居に掘り込まれていること及び土師器坏の形状から6世紀後葉と考えられる。

第19号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	器直径(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	坏 土師器	A 15.1 B (3.9)	底部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き。内面黒色気味。	長石・雲母・スコリア に多い赤褐色 普通	P121 60% PL15 覆土中
2	坏 土師器	A [14.2] B (4.6)	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との間に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り, 内面ナデ。内・外面黒色気味。	雲母 黒褐色 普通	P120 30% 覆土中
3	甕 土師器	A [19.0] B (3.8)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ, 内面ヘラ磨き。甕部外面ヘラ削り。	長石・雲母 に多い褐色 普通	P122 10% 床面
4	甕 土師器	B (12.6) C 8.8	底部から体部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後, ナデ, 内面ナデ。	長石・スコリア に多い褐色 普通	P123 30% 床面・覆土中
5	甕 土師器	A 19.4 B 27.6 C (9.6)	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・雲母 に多い褐色 普通	P125 50% PL15 埋内・覆土中
6	甕 土師器	A [25.6] B 31.7 C 8.1	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。甕部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ磨き, 内面ナデ。甕部直れ。	石英・雲母 に多い褐色 普通	P126 70% PL16 床面・覆土中
7	甕 土師器	A [22.6] B (30.7)	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。甕部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ磨き, 内面ヘラナデ。	石英・雲母 に多い褐色 普通	P121 60% PL16 覆土中



第37图 第19号住居跡出土遺物実測図

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

今回の調査によって奈良・平安時代の竪穴住居跡7軒が確認されている。以下、検出した住居跡の特徴や遺物について記載する。

第1号住居跡（第38図）

位置 調査区の北部、I 4 d9区。

規模と平面形 長軸 [3.90] m, 短軸2.60mの長方形である。

主軸方向 N-7°-W

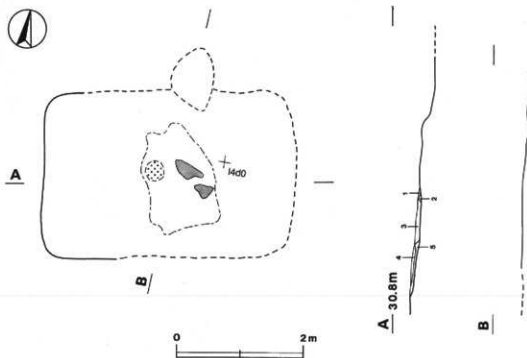
壁 壁高は7~35cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

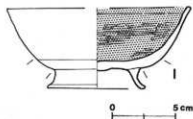
覆土 5層からなるが、覆土が薄いため、堆積状況は明確ではない。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 4 褐色 炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量



第38図 第1号住居跡実測図



第39図 第1号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片7点（坏片3点、甕片4点）が出土している。第39図1の土師器高台付坏は、覆土中から出土している。

所見 本跡の竈は、東側が削平されているため確認できなかったが、焼土が北壁中央部にわずかに残存しており、北壁側に竈があった可能性がある。時期は、1点の遺物で判断するのは困難であるが、遺構の規模・

形態から10世紀前葉と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39回 I	高台付杯 七師器	A 14.6 B 6.4 D 7.9 E 1.6	高台部から口縁部片。高台はハの字状に開く。体部は内唇気味に外傾し、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部・体部外側口ロナテ。体部下端屈転ヘテ開り。内面ヘテ崩さ。内面屈色処理。高台盛り付け。	石英・スコリア にぶい褐色 普通	P1 60% PL19 復土中

第5号住居跡 (第40図)

位置 調査区の中央部、I 4 e8区。

重複関係 本跡が、第17号住居跡を掘り込んでいる。

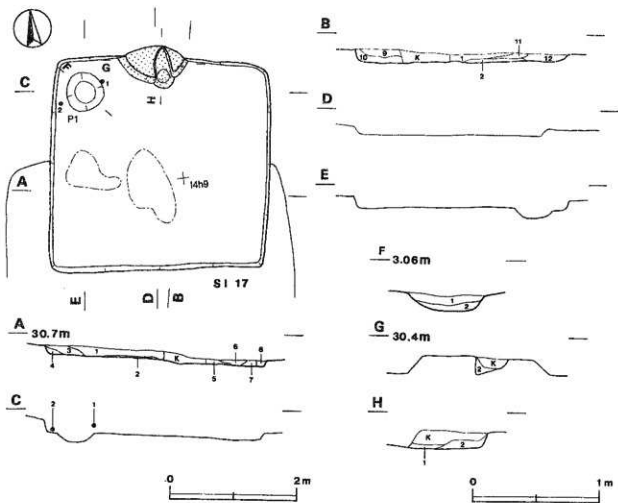
規模と平面形 長軸3.45m、短軸3.25mの方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部と西側の一部が踏み固められている。

ピット P1は、径60cmの円形、深さ17cmであり、竈西袖部の西側に掘り込まれている。位置から竈に関連するピットと考えられる。



第40図 第5号住居跡実測図

P1土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック多量、焼土小ブロック、炭化物微量
- 2 柿崎褐色 ローム小ブロック少量、焼土中ブロック、ローム中ブロック、焼土粒子微量

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで67cm、両袖最大幅112cm、壁外への掘り込みは18cmである。火床部は、床面を3cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

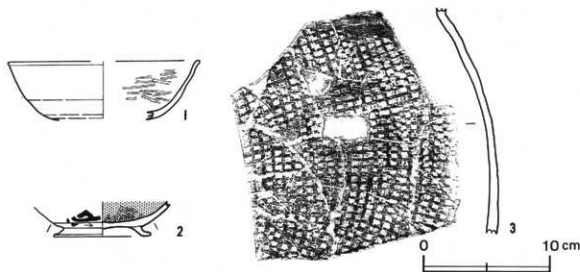
- 1 にぶい褐色 焼土大・小ブロック、焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック、炭化粒子、ローム小ブロック微量

覆土 12層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化物少量、焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 2 褐色 焼土粒子、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子、ローム小ブロック微量
- 5 褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 6 褐色 焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 7 にぶい褐色 焼土粒子、ローム大・小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 8 暗褐色 炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 9 暗褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 10 褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 11 黒褐色 炭化粒子少量、焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、ローム粒子、粘土粒子微量
- 12 暗赤褐色 焼土大・中・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム粒子、粘土粒子、灰微量

遺物 土師器片173点（坏片31点、甕片142点）、須恵器片4点（蓋片3点、甕片1点）、混入とみられる弥生土師器片1点が出土している。覆土上層では、第41図1の土師器坏が北西コーナー部付近から出土している。床面では、2の土師器高台付坏が西壁際から出土している。3は土師器甕で、外面に格子目叩きが施されている。所見 土師器高台付坏の形状や須恵器片が極めて少ないことから、本跡の時期は10世紀前葉と考えられる。



第41図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	坏 土師器	A [15.2] B (4.6)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。	長石・雲母にぶい褐色 普通	P10 30% 覆土中
2	高台付坏 土師器	B [2.7] D 7.6 E 0.8	高台部から体部片。高台はハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ロクロナデ、内面ヘラ磨き。体部下端回転ヘラ磨り。内面黒色処理。体部外面下縁に磨き。	雲母・スコリア 褐色 普通	P11 20% 床面

第6号住居跡 (第42図)

位置 調査区の中央部, I 4 j8区。

重複関係 本跡が, 第7・8号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.80m, 短軸3.05mの長方形である。

主軸方向 N-87°-E

壁 壁高は20~30cmで, 外傾して立ち上がる。

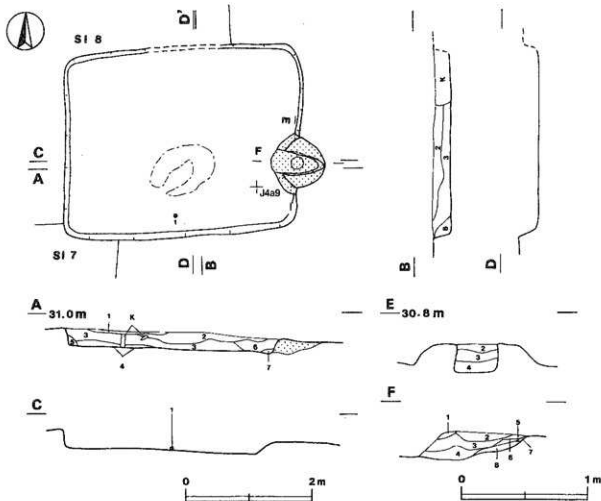
床 平川で, 中央部の一部が踏み回められている。

竈 東壁やや南寄りに, 砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚き口部まで85cm, 両袖最大幅97cm, 壁外への掘り込みは42cmである。火床部は, 床面を4cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 粘暗褐色 炭化物, ローム粒子, 粘土粒了微量
- 2 黒褐色 炭化粒了少, 炭化物, ローム小ブロック, ローム粒了, 粘土粒了微量
- 3 暗褐色 炭化物, 炭化粒子, ローム小ブロック, ローム粒子, 粘土粒子微量
- 4 黒褐色 炭化粒子少量, 焼土小ブロック, 焼土粒子, 炭化物, ローム小ブロック, ローム粒子, 粘土粒子, 灰微量
- 5 黒褐色 焼土小ブロック, 焼土粒子, 炭化粒子, ローム粒了微量
- 6 黒褐色 焼土粒子, 炭化物, 炭化粒子, ローム小ブロック, ローム粒子, 粘土粒了微量
- 7 暗褐色 焼土粒了, 炭化物, 炭化粒子, ローム粒了, 粘土粒了, 灰微量
- 8 極暗褐色 焼土小ブロック, 焼土粒了, 炭化物, 炭化粒子, ローム小ブロック, ローム粒子, 粘土粒子, 灰微量

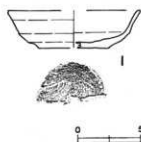
覆土 8層からなり, レンズ状の堆積を示し, 自然堆積である。



第42図 第6号住居跡実測図

土層解説

- 1 褐色 焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量、焼土小ブロック、炭化物、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 4 暗褐色 炭化粒子、ローム大・中・小ブロック、ローム粒子微量
- 5 褐色 炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量



第43図 第6号住居跡出土
遺物実測図

- 6 褐色 焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
 - 7 黒褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
 - 8 褐色 炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 遺物 土師器片281点（坏片76点、高坏片1点、甕片204点）、須恵器片7点（坏片7点）、混入とみられる弥生土器片11点が出土している。第43図1の土師器坏は、中央部南側の床面から出土している。

所見 本跡の時期は、庵の位置及び出土遺物から10世紀前葉と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	坏 土師器	A [10.6] B 3.0 C [5.4]	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロコナデ。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P14 40% 床面

第7号住居跡（第44図）

位置 調査区の中央部、J 4 a7区。

重複関係 本跡が、第8号住居跡を掘り込み、第6号住居に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.71m、短軸3.62mの方形である。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高は15~25cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第6号住居に掘り込まれている北東コーナー部壁下を除いて巡っている。上幅15~25cm、下幅3~15cm、深さ9~17cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部と南東側の一部が踏み固められている。

ピット P1は、長径44cm、短径37cmの楕円形、深さ39cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで90cm、両袖最大幅96cm、壁外への掘り込みは43cmである。火床部は、床面を2cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がり、のち角度を変えて外傾して立ち上がる。

電土層解説

- 1 暗褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム大・中・小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量
- 2 極暗赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム粒子、粘土粒子、灰微量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子、粘土粒子、灰微量
- 4 暗赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、粘土粒子、灰微量
- 5 極暗赤褐色 焼土中・小ブロック、焼土粒子、焼土中・小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム粒子、粘土粒子、灰微量

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

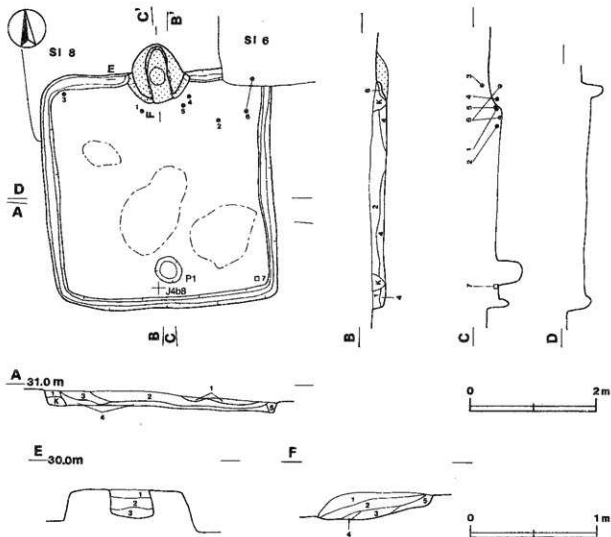
土層解説

- 1 極暗褐色 焼土小ブロック、ローム大・中・小ブロック、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、ローム大・中ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量、焼土中ブロック、ローム中ブロック、ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量

- 5 藍褐色 rome 粘土少量, 辰化粘土, ローム小ブロック微量
 6 赤褐色 焼土粘土, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック, 粘土粘土微量

遺物 土師器片97点(坏片29点, 甕片68点), 須恵器片6点(坏片5点, 蓋片1点), 石製品1点, 鉄滓30.0g, 混入とみられる縄文土器片1点, 弥生土器片2点が出上している。覆土上層では, 第45図3の須恵器蓋が北西コーナー付近から出土している。覆土下層では, 2の土師器ミニチュア土器が中央部北東側から, 7の甕が南東コーナー部から出土している。床面では, 1の上師器甕が竈の前方部から, 4, 5の須恵器蓋が竈の束袖部付近から出土している。4は逆位で, 5は正位で出土している。6の須恵器蓋は, 中央部と北東コーナー部付近の床面から出土した破片が接合している。

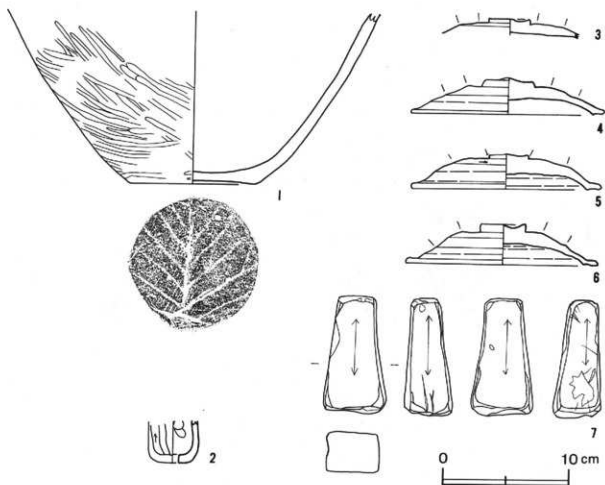
所見 本跡の時期は, 重複関係や須恵器蓋の形状から8世紀前後と考えられる。



第44図 第7号住居跡実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	甕 土師器	B 13.7 C 10.2	底部から体部片, 半底。体部は内湾気味に立ち上がる。	体部外向へラ巻き, 内面ナア。底部木炭痕。器面剥離。	辰石・石灰・雲母に多い褐色 普通	P15 30% 漆刺



第45図 第7号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	肩径値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 2	ニチャア器 土師器	B (3.3)	底唇から体部片。丸底。体部は直線的に立ち上がる。底部に外面からの焼成前の穿孔がみられる。	体部外面へつ削り、内面ナデ。内面指痕残。	長石 にふい橙色 普通	P16 40% PL10 覆土中
3	蓋 須恵器	B (1.5) F 3.3 G 0.4	つまみ部から天井部片。つまみは扁平なボタン状である。	天井部内・外面ロクロナデ。天井部上位回転へつ削り。	長石・石英 浅黄色 普通	P17 40% 覆土中
4	蓋 須恵器	A 15.5 B 2.9 F 4.2 G 0.7	口縁部一部欠損。つまみは扁平なボタン状である。天井部は低く、口縁部内面に短いかえりを持つ。	口縁部。天井部内・外面ロクロナデ。天井部上位回転へつ削り。	長石・石英・雲母・スコリア・白色針状物 橙色 普通	P20 95% PL10 床面 二次焼成
5	蓋 須恵器	A 15.1 B 2.6 F 3.1 G 0.3	口縁部一部欠損。つまみは扁平なボタン状である。天井部は低く、口縁部内面に短いかえりを持つ。	口縁部。天井部内・外面ロクロナデ。天井部上位回転へつ削り。	長石・雲母・白色針状物 橙色 普通	P19 90% PL10 床面 二次焼成
6	蓋 須恵器	A 15.4 B 3.2 F 3.7 G 0.6	つまみ部から口縁部片。つまみは扁平なボタン状である。天井部は低く、口縁部内面に短いかえりを持つ。	口縁部。天井部内・外面ロクロナデ。天井部上位回転へつ削り。	長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P18 70% PL10 床面 二次焼成

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
7	砥石	9.2	4.8	3.2	236.6	凝灰岩	覆土中	Q1 PL18

第9号住居跡 (第46区)

位置 調査区の中央部、J 4 b6区。

重複関係 本跡は、第2号土坑によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.40m、短軸3.20mの方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は25~43cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東コーナー部壁下を除いて巡っている。上幅13~25cm、下幅3~10cm、深さ4~5cmで、断面形はU字状である。

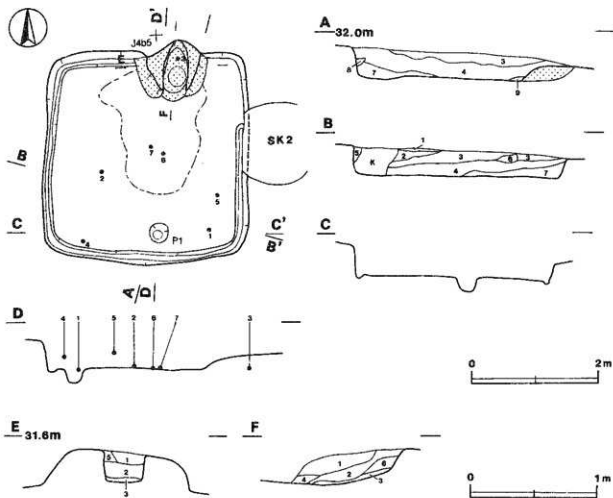
床 平坦で、竈の前方から中央部にかけて踏み固められている。

ピット P1は、径30cmの円形、深さ22cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部東寄りに、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで119cm、両袖最大幅96cm、壁外への掘り込みは24cmである。火床部は、床面を4cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 灰 褐色 ローム粒中量、ローム中・小ブロック少量、焼土小ブロック、焼土粒子、粘土粒少量
- 2 黒 褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒少量、焼土中ブロック、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒少量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック少量、焼土小ブロック、焼土粒子、粘土粒少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒中量、粘土粒少量、ローム小ブロック少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒中量、ローム中ブロック、灰少量



第46図 第9号住居跡実測図

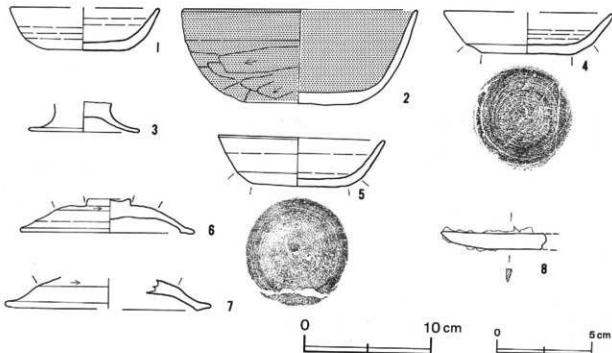
覆土 9層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 極褐色 炭化粒子少量、焼土小ブロック、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、炭化物、炭化粒子、ローム大・中・小ブロック微量
- 3 暗褐色 炭化物、炭化粒子、ローム大・中・小ブロック、ローム粒子微量
- 4 褐色 焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム大・中・小ブロック、ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム大ブロック、ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 6 褐色 炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 7 褐色 焼土小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子、ローム中・小ブロック微量
- 9 黒褐色 焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム大・小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量、灰粉微量

遺物 土師器片208点(坏片31点、碗片4点、甕片173点)、須恵器片38点(坏片15点、蓋片20点、甕片3点)、鉄製品1点、鉄滓180g、混入とみられる縄文土器片4点、弥生土器片6点が出土している。覆土上層では第47図5の須恵器坏が東壁付近から出土している。覆土中層では、4の須恵器坏が南壁付近から出土している。床面では、1の土師器坏が南東コーナー部付近から、2の土師器碗が中央部西側から、6、7の須恵器蓋が中央部から出土している。6は斜位で出土している。竈内では、3の土師器高坏が出土している。覆土中から8の刀子が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から8世紀前葉と考えられる。



第47図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第47図 1	土師器 坏	A [12.0] B 3.4 C 5.4	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面口ロナデ。底部不定方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母・スロリア に多い褐色 普通	P27 30% 床面
2	土師器 碗	A 18.4 B 7.6 C 8.6	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面口ロナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。底部不定方向のヘラ削り。内・外面黒色処理。内面器面割線。	石英・雲母 に多い褐色 普通	P28 70% PL10 床面
3	高土師器 坏	D 8.8 E 2.2	脚部片。脚部はラップ状で、縦長に大きく広がる。	脚部外面ナデ。脚部内・外面口ロナデ。	長石・石英・雲母・スロリア に多い褐色 普通	P29 30% PL10 竈内
4	須恵器 坏	A [13.4] B 3.3 C 7.0	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面口ロナデ。底部回転ヘラ削り。	雲母・パミス に多い褐色 普通	P30 60% PL10 覆土上

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第47回 5	坏 須忠器	A 13.2 B 4.0 C 7.3	底部から1編部片。平底。体部は外 観して立ち上がり、1編部に至る。	1編部、体部内・外面ロクロナデ。 底部回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	P.31 70% PL.11 優土中
6	須 忠器	A 13.8 H 2.8 F 3.6 G 0.6	口縁部一部欠損。つまみは扁平なボ タン状である。口縁部内面に刻い かえりを持つ。	口縁部、天井部内・外面ロクロナデ。 天井部上位回転ヘラ削り。	雲母・バミス にふい褐色 普通	P.32 90% PL.11 灰土
7	赤 須忠器	A [16.2] B (2.3)	天井部から口縁部片。1編部内面に 刻いかえりを持つ。	口縁部、天井部内・外面ロクロナデ。 天井部上位回転ヘラ削り。	長石・雲母・白色針 状物 にふい褐色 普通	P.32 20% 灰土

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)		
8	月 子	(5.5)	(1.0)	(3.0)	(2.8)	覆土中	M1 PL.18

表2 内宿井戸作城跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	建坪: 長軸×短軸 (cm)	取高 (cm)	床面	内部施設				覆土	出土遺物	備考 新B1関係(古→新)	
							壁溝	土柱穴	土間 ピット	炉・竈				
1	J449	N-7-W	長方形	6.9×1.8	7~35	平壇	—	—	—	—	不明	土層(宮内)		
2	J448	N-5-E	方形	5.9×1.0	25~32	平壇	全周	4	1	1	1	人為	土層(宮内)	SI-19→本跡
3	J551	N-10-E	長方形	3.8×1.5	6~14	平壇	—	—	1	—	1	不明	土層(宮内)	
4	J447	N-11-W	方形	4.5×1.6	38~66	平壇	全周	2	—	1	1	自然	土層(宮内)	
5	J448	N-7-E	方形	1.6×1.5	10~20	平壇	—	—	—	1	1	自然	土層(宮内)	SI-17→本跡
6	J448	N-10-E	長方形	3.9×1.0	20~30	平壇	—	—	—	—	1	自然	土層(宮内)	SI-8→SI-7→本跡
7	J447	N-5-W	方形	3.3×1.8	15~25	平壇	一部	—	1	—	1	自然	土層(宮内)	SI-6→本跡→SI-6
8	J448	N-5-W	方形	6.5×1.3	10~40	平壇	一部	4	—	—	1	自然	土層(宮内)	本跡→SI-7→SI-6
9	J446	N-3-E	方形	3.0×1.3	25~43	平壇	一部	—	1	—	1	自然	土層(宮内)	本跡→SI-2
10	J445	N-4-E	方形	2.6×1.8	52~56	平壇	一部	—	—	—	1	自然	土層(宮内)	
11	J445	N-6-E	方形	7.8×1.2	20~64	平壇	全周	4	1	1	1	自然	土層(宮内)	
12	J449	N-13-W	方形	3.3×1.5	6~46	平壇	全周	4	1	—	1	人為	土層(宮内)	
13	J440	N-9-W	方形	3.2×1.0	23~66	平壇	全周	4	1	—	1	自然	土層(宮内)	
14	J551	N-10-W	方形	2.2×1.2	38~53	平壇	—	—	—	—	1	自然	土層(宮内)	
15	J448	N-6-E	方形	4.6×1.2	13~35	平壇	一部	2	—	1	1	自然	土層(宮内)	本跡→SI-2
16	J445	N-10-W	長方形	6.2×1.3	10~30	平壇	一部	4	1	3	1	自然	土層(宮内)	
17	J449	N-2-E	方形	3.8×1.6	36~52	平壇	全周	4	1	—	1	自然	土層(宮内)	本跡→SI-5
18	J441	N-13-W	方形	5.8×1.5	13~25	平壇	一部	4	1	—	1	自然	土層(宮内)	本跡→SI-2
19	J449	N-6-E	方形	4.6×1.3	32~45	平壇	一部	4	1	1	1	自然	土層(宮内)	本跡→SI-2

3 中世の遺構と遺物

(1) 土塁

今回の調査によって、土塁2条が確認されている。ここではそれぞれの土塁の概要を記述する。

第1号土塁 (第48図)

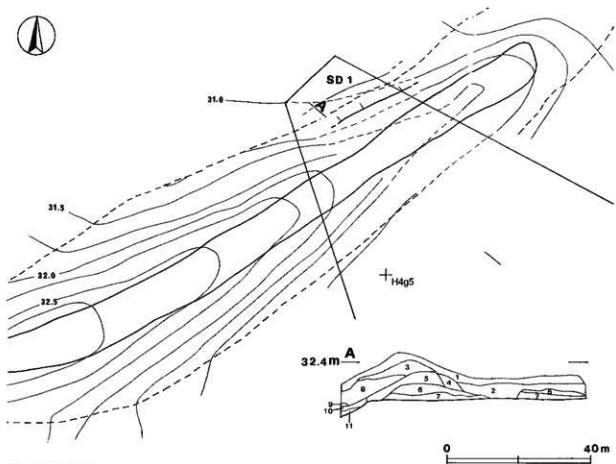
位置 調査区の北端部, H 4 f5区。

平面形 直線状である。

方向 北東方向から南西方向に延びている。調査区内の長さは8m, 全体の長さは約22mである。

規模 トレンチ調査による土層断面観察を行った。断面観察地点における基底面の最大幅は約3.60m, 頂上部の最大幅は約0.96mである。土塁の高さは, 約1.26m, 頂上部標高は約32.60mである。斜度は外側で約60度, 内側で約40度である。

構築状況 第6層(ソフトローム)を土塁構築時の基部とし, その上面に第3~5層の上を積み上げて構築したものと考えられる。第1層は現在の表土である。第2層は, 盛土である第3層の覆土と色や粒子が似ていることから第3層の土が流出したかと思われる。この土塁は, 後述する第1号堀と一体で郭を構成するための土塁である。北側の台地上からの外敵を防御するための機能をもつものと思われる。



第1号土塁土層解説

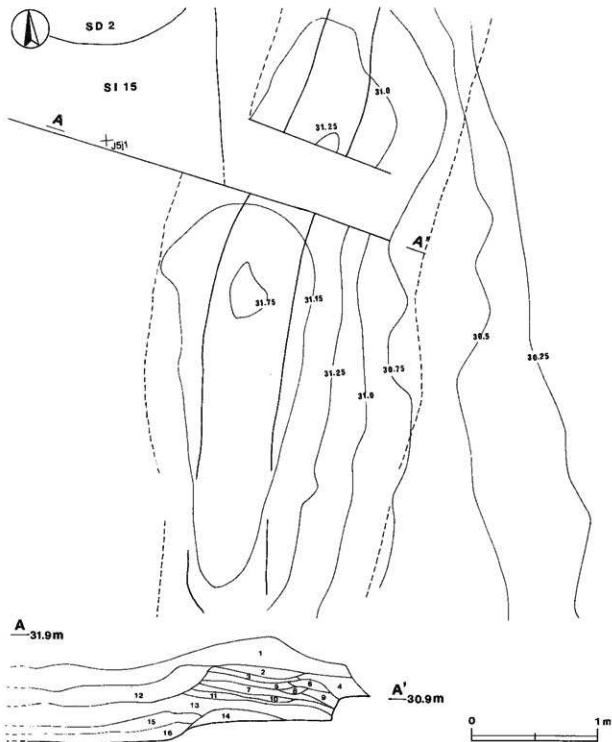
- 1 黒褐色 ローム小ブロック, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック, ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム中ブロック, ローム粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム大・中ブロック, ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック, ローム粒子少量, ローム大ブロック微量
- 6 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック, ローム大・中ブロック少量
- 7 褐色 ローム小ブロック, ローム粒子多量, ローム大・中ブロック微量

第1号堀土層解説

- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化物, ローム大・中ブロック微量
- 9 褐色 ローム中・小ブロック, ローム粒子少量, 焼土粒子
- 10 極暗褐色 焼土粒子, ローム大・中・小ブロック, ローム粒子微量
- 11 暗褐色 ローム中・小ブロック少量, ローム大ブロック, ローム粒子微量

第48図 第1号土塁, 第1号堀実測図

第2号土塁 (第49図)



第2号土塁土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒少量
- 2 黒褐色 ローム大・中・小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム中・小ブロック少量、焼土中ブロック、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量
- 5 黒褐色 ローム大・中・小ブロック少量、ローム粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック、ローム粒中量
- 7 褐色 ローム大ブロック、ローム粒中量、ローム中・小ブロック少量
- 8 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック、ローム粒子微量

- 9 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子少量
- 10 暗褐色 ローム中・小ブロック少量、ローム粒少量、ローム大ブロック微量
- 11 黒褐色 ローム中・小ブロック少量、ローム粒微量
- 12 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒少量、炭化物、炭化粒子微量
- 13 黒褐色 焼上粒、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 14 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒少量、ローム中ブロック微量
- 15 褐色 ローム粒中量、ローム大・中ブロック少量
- 16 暗褐色 ローム大・中・小ブロック、ローム粒微量

第49図 第2号土塁実測図

位置 調査区の南東部，J 5 Ⅱ区。

平面形 直線状である。

方向 南北方向に延びている。調査区内の長さは約10m，全体の長さは約12mである。

規模 トレンチ調査による土層断面観察を行った。断面観察地点における基底面の最大幅は約4.40m，頂上部の最大幅は約1.30mである。土塁の高さは約1.31m，頂上部標高は31.25～31.75mである。斜度は外側で約40～45度，内側で約30～50度である。

構築状況 盛土は9層確認できた。第2・3・5～11層は厚さ約10cmの稿状になっている。特に第8～11層はかたく締まりがあり，突き固めて構築されたと思われる。第2・3・5～7層はあまり締まりはみられない。これらの層にはロームブロックが多く含まれるが，特に第7層に多く含まれている。第4層は木根による攪乱を一部受けているが，ロームブロックの含有が多く，土塁側面の補強の役割を果たしたと考えられる。第13層は土塁構築時の旧地表面と考えられる。第1層は現在の表土である。第15・16層は，第15号住居跡の覆土である。この土塁は，後述する第2号堀と一体で郭を構成するための土塁である。西側の斜面部からの外敵を防御するための機能をもつものと考えられる。

(2) 堀

今回の調査によって，堀2条が確認された。ここではその概要を記述する。

第1号堀（第48図・付図）

位置 調査区の北端部，H 4 Ⅱ区。

方向 本跡は調査区北端の境界線上にあり部分的にしか確認できないが，第1号土塁と並行し，北東方向から南西方向，N-55°-Eにほぼ直線的に延びていると考えられる。

規模と形状 上幅，下幅，表土からの深さ，断面形は不明である。

壁面 南側の確認できる部分では，30～45度の角度で立ち上がる。

底面 調査区外のため確認できない。

覆土 覆土は第8～11層の4層からなる。堆積状況から，4層とも第1号土塁の土が流れ込んでいる。

遺物 出土していない。

所見 本跡は，北東から南西方向に直線状に延びる第1号土塁に沿って設けられた堀である。

第2号堀（第49図）

位置 調査区の南部，J 4 Ⅲ区からJ 5 Ⅲ区に確認され，本跡の東側には第2号土塁がある。

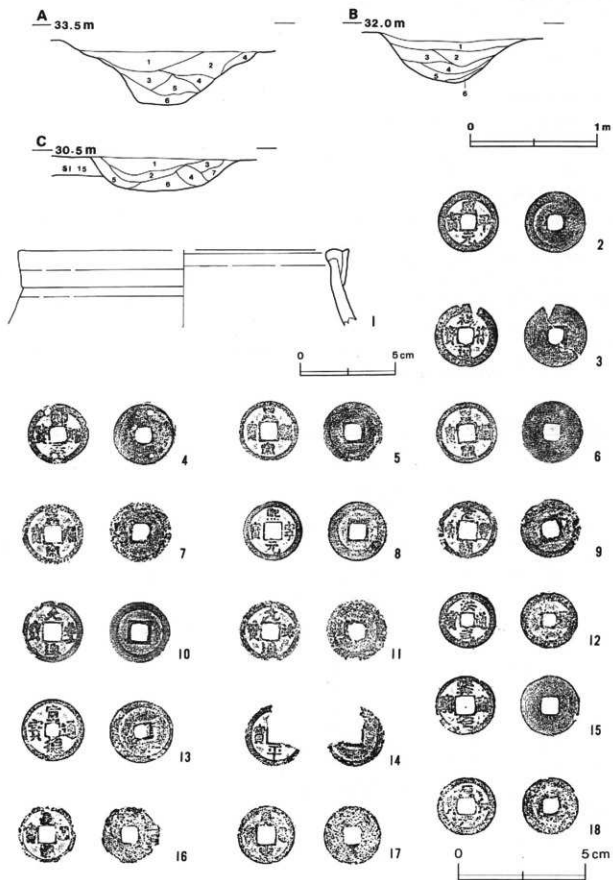
方向 西方向から東方向，N-92°-Eにほぼ直線的に42.9m延びている。

規模と形状 規模は上幅0.68～1.18m，下幅0.21～0.45m，表土からの深さ約0.52～0.83mである。断面形は西側が箱笥状，東側がU字状を呈している。

壁面 南側では45～60度，北側では35～40度の角度で立ち上がる。

底面 西側半分はほぼ平坦で，東側は丸みを持つ。

覆土 1・2区は6層，3区は7層からそれぞれなる。覆土中のロームブロックの含有が多いことやブロック状の堆積を示していることから，人為堆積と考えられる。



第50图 第2号坩土层断面图·出土遗物实测图

第2号堀1区土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子、ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック、ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム大・中ブロック少量、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 5 棕褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 6 褐色 ローム大ブロック、ローム粒子少量、炭化粒子、ローム中・小ブロック微量

第2号堀2区土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、ローム大・中ブロック微量
- 3 褐色 ローム小ブロック、ローム粒子中量、ローム大・中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック、ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック微量
- 6 棕褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子微量

第2号堀3区土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック、ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック少量、ローム粒子微量
- 5 棕褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 7 灰褐色 ローム小ブロック少量、焼土中・小ブロック、焼土粒子、ローム粒子微量

遺物 土師器片88点(坏片21点、甕片67点)、陶器片(甕片7点)、古銭17枚(北宋銭10枚、明銭2枚、不明5枚)が出土している。3区の覆土中から第50図1の常滑系陶器甕(11型式期)が出土している。

所見 覆土中から15世紀前半のものと思われる常滑系陶器や14世紀後半～15世紀前半に铸造された明銭が出土していることから、本跡は少なくとも15世紀前半までは存在していたと考えられる。

第2号堀出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	甕	A (34.8) B (8.1)	外器上段から口縁部片。朱筋から強く外反して下方に4cmほど折れた口縁部は、折り返し上端から斜め上方に向けつけられた隆起帯と相俟って幅広い縁帯をなす。	内面ナデ。	灰色 (輪) 灰オリ・ゾ色 普通	P127 5% 常滑系 覆土中

図版番号	(古銭) 銭種	鋳造年		出土地点	備考
		時代	西暦		
2	咸平元寶	北宋	998年	覆土中	M12 PL18
3	祥符通寶	北宋	1009年	覆土中	M10 PL18
4	明道元寶	北宋	1032年	覆土中	M9 兼養 PL18
5	皇宋通寶	北宋	1038年	覆土中	M2 PL18
6	崇寧通寶	北宋	1038年	覆土中	M3 PL18
7	崇寧通寶	北宋	1038年	覆土中	M4
8	熙寧元寶	北宋	1068年	覆土中	M11 PL18
9	元豊通寶	北宋	1078年	覆土中	M5 PL18
10	元豊通寶	北宋	1078年	覆土中	M6 PL18
11	元祐通寶	北宋	1086年	覆土中	M7 PL18
12	洪武通寶	明	1368年	覆土中	M18 PL18
13	宣徳通寶	明	1433年	覆土中	M8 PL18
14	□平□寶	不明	不明	覆土中	M14
15	不明	不明	不明	覆土中	M13 PL18
16	不明	不明	不明	覆土中	M15 PL18
17	不明	不明	不明	覆土中	M16 PL18
18	不明	不明	不明	覆土中	M17 PL18

4 その他の遺構と遺物

(1) 土坑

今回の調査によって土坑3基が確認されている。ここではそれぞれの上坑の概要を記述する。

第1号土坑 (第51図)

位置 調査区の南西部, J 4 f1区。

規模と平面形 西部は調査区域外となっているが, 長軸 (3.62) m, 短軸2.45mで長方形と推定され, 深さは65cmである。

長軸方向 N-69°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり, ローム小ブロックを含み水平堆積を示していることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック, ローム粒子少量, 炭化粒子微量, 炭化物, ローム中ブロック微量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック, ローム粒子少量, 炭化粒子微量, ローム大ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒中級, ローム小ブロック少量, ローム大・中ブロック微量

遺物 土師器片36点 (坏片5点, 甕片31点), 須恵器片 (坏片2点) が覆土中から出土しているが, いずれも細片であり, 図示できるものはない。

第2号土坑 (第51図)

位置 調査区の中央部, J 4 b6区。

重複関係 本跡が, 第9号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 径1.35mの円形で, 深さは26cmである。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層からなり, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量, 炭化物, 炭化粒子, ローム大・中・小ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック, 炭化粒子, ローム大・中・小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック少量, 焼土小ブロック, 炭化物, 炭化粒子, ローム中・小ブロック, ローム粒子微量
- 4 暗褐色 炭化粒子少量, 炭化物, ローム大・中・小ブロック, ローム粒子微量

遺物 土師器片1点 (甕片1点) が覆土中から出土しているが, 細片であり, 図示できるものはない。

所見 本跡の時期は, 限定できる遺物がなく不明であるが, 第9号住居跡を掘り込んでいることから, 9世紀後葉以降と考えられる。性格については不明である。

第3号土坑 (第51図)

位置 調査区の南側, J 4 g6区。

規模と平面形 径0.50mの円形で, 深さは22cmである。

長径方向 N-88°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

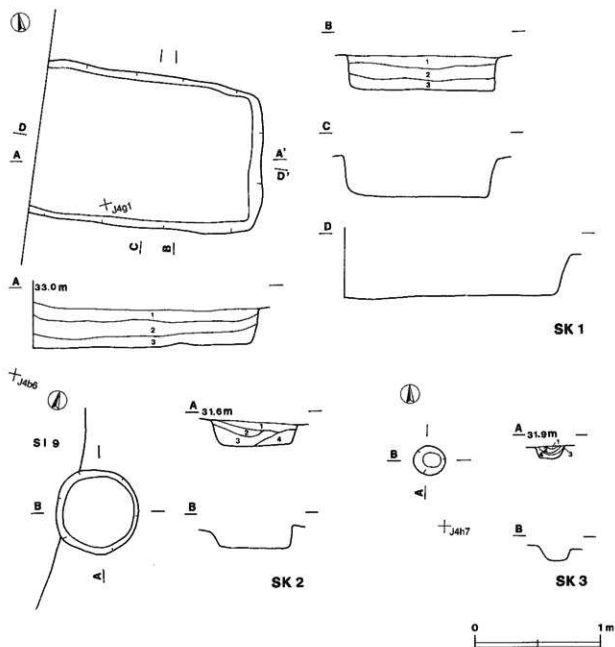
底面 皿状である。

覆土 4層からなり、ロームブロックの含有が多いことや焼上ブロック、炭化物などが含まれることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子少量、炭化物、炭化粒子、ローム中ブロック微量
- 2 暗赤褐色 ローム中・小ブロック、ローム粒子中量、粘土粒子少量、炭化物、炭化粒子、灰微粒
- 3 におい赤褐色 焼土粒子、焼上小ブロック、炭化物、炭化粒子、ローム小ブロック、ローム粒子、粘土粒子、灰微粒
- 4 におい赤褐色 焼土小ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子、ローム大・中・小ブロック、ローム粒子、粘土粒子微量

遺物 出土していない。



第51図 第1・2・3号土坑実測図

表3 内宿井戸作城跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		形	断面	向	覆土	出土遺物	備考
				長さ(m)	深さ(cm)						
1	J4口	N-60°-W	長方形	3.62	2.43	65	外傾	平切	人為	土師器片(坏片, 欠片, 須恵器片(坏片))	
2	J4b6	—	円形	1.39	1.35	26	外傾	平切	自然	土師器片(欠片)	SI-9-一本跡
3	J4g6	—	円形	0.52	0.48	22	外傾	圓状	人為		

(2) 遺構外出土遺物

古墳時代から奈良・平安時代の遺構に、旧石器時代の石器や縄文土器、弥生土器が混入している。また、試掘調査の際に出土した遺物もある。これらを含めて遺構外出土遺物として報告する。

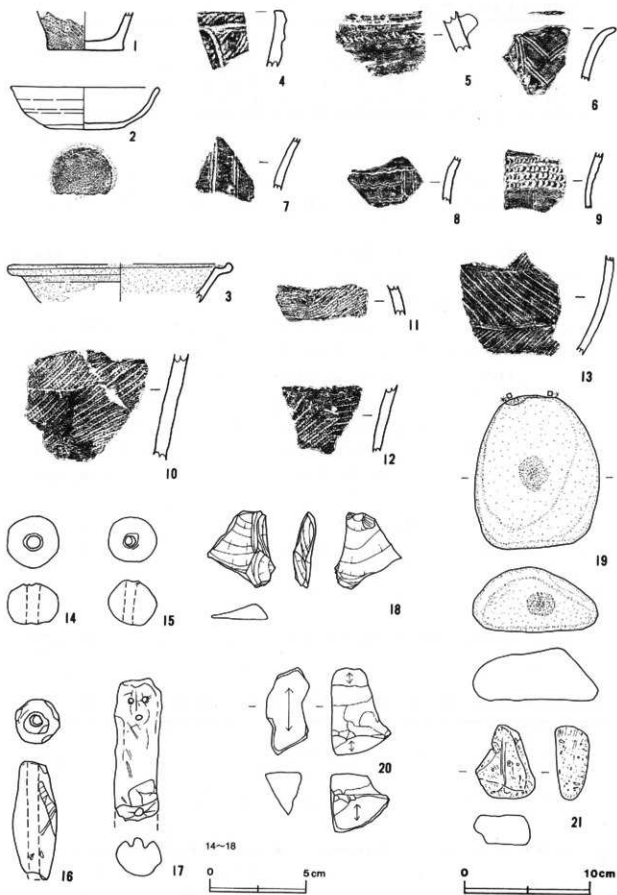
第52図4・5は縄文土器片である。4は口縁部片で、地文に無節Lの縄文が施され、L縁部は平行沈線と胴部に向かって直線的に懸垂する沈線が描かれている。5はL縁部片で、隆帯上に単節RLの縄文が施されている。また、隆帯に沿うような沈線が施されている。

第52図6～12は弥生土器片である。6はL縁部片で、3本櫛歯による縦区画と山形文が施されている。口唇部には、縄文原体による押圧文が施されている。7はL縁部片で、2本櫛歯による縦区画が施されている。8はL縁部片で、2本櫛歯による縦区画が施された後、3本櫛歯による横走波状文が3段に施されている。9はL縁部から胴上部片で、L縁部には4条の隆帯に対するヘラ状工具による刻みが施されている。胴上部には、7本1組の櫛歯状工具による横走波状文が施されている。10～13は胴部片で、10は付加条一種付加2条の縄文が、12は付加条一種付加2条の縄文が、11は付加条二種付加1条の縄文がそれぞれ施されている。13は上位に付加条二種付加1条の縄文が、下位に付加条一種付加2条の縄文が施され、振幅の小さい横走波状文で区画されている。

第52図17は人面付土製品である。径2.4cmの筒形を呈し、下部は欠損している。頭頂部と下部から焼成前の穿孔がみられるが、貫通していない。頭部に焼成前に棒状工具による刺突で1対の目と口を表現している。手で掘って形を整えた後、ナデている。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第52図 1	広口帯 赤土器	B (3.0) C 5.9	底部から頸部片、平底、胴部は外傾して立ち上がる。文様は胴部に付加条一種付加1条の縄文が施されている。内面器面側。	灰石・雲母 褐色 普通	P128 10% 腹上中	
第52図 2	坏 土師器	A (11.8) B (3.4) C 4.7	底部から口縁部片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面クロコナデ、底部回転系切り。	石英・雲母・ハミス 褐色 普通	P111 20% 表探
3	鉢 陶器	A (17.6) B (3.0)	底部からL縁部片。体部は外傾し、L縁部は強く外反し、ほぼ水平である。底部は内傾に折り込まれている。	L縁部、体部内・外面クロコナデ、水抜き。	灰石 胎土色 灰白色 釉 オリーブ灰色 普通	P129 5% 表探



第52図 遺構外出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考	
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第52図14	土 瓦	2.6	2.1	0.7	14.9	表探	D P 22	100% PL17
15	土 瓦	2.5	2.3	0.6	12.2	表探	D P 23	100% PL17

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
16	管状土磚	6.2	2.3	0.6	25.8	表探	D P 21	PL17
17	入内+製品	(7.5)	2.4	0.4	(47.2)	表探	D P 20	PL17

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
18	石 核	1.0	3.5	0.8	9.3	頁 岩	SI 16 腹上中	Q6	PL18
19	円 石	12.2	9.8	5.1	806.5	砂 岩	表探	Q7	PL18
20	瓦 石	6.8	3.3	4.7	80.7	凝灰岩	表探	Q8	PL18
21	軽 石	5.7	4.7	2.7	12.1	凝灰岩	表探	Q9	PL18

第4節 まとめ

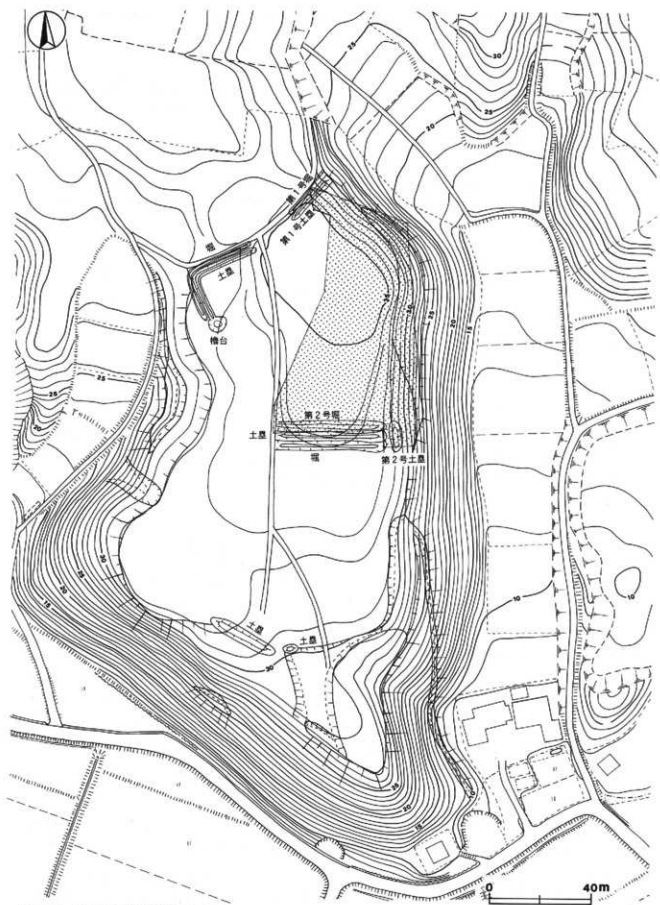
当遺跡は、南北に入り込んだ小支谷に囲まれた台地の先端部（標高30～33m）に形成されている。今回の調査で、古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡19軒が確認された。また、調査区内の北端と南東部から土壘が、北端と南端から堀が確認された。以上のことから、各時代ごとの集落の特徴や出土遺物について概要を述べるとともに、作成した縄張り図をもとに内宿井戸作の全体像にも迫りたい。

古墳時代後期

該期にあたる住居跡は、6世紀中葉が1軒（第11号住居跡）、6世紀後葉が13軒（第2、3、4、8、12～19号住居跡）であり、特に6世紀後葉に集中している。隣接している木上土遺跡でも6世紀後葉のものが31軒検出され、最も多い。6世紀中葉の住居跡の平面形は方形で、規模は一辺が約7.9mである。主軸方向はN-0°である。6世紀後葉の住居跡の平面形は方形が10軒、長方形が3軒である。規模は、長軸または一辺が2～4mのものが3軒、5m前後のものが7軒、6～8mのものが3軒であり、木上土遺跡の同時期の住居跡に比べ小形である。主軸方向は西嚢を持つ第14号住居跡を除いて、N-14°-W～N-10°-Eの範囲にある。出土遺物としては、6世紀中葉の住居跡から赤彩された土師器高坏、黒色処理された土師器坏が出土している。6世紀後葉の住居跡の出土遺物は、黒色処理された坏の割合が多くなる。壺は口縁部と体部との境に明瞭な稜を持つものと、口縁端部を外上方につまみ上げた土師器常総型壺が混在している。

奈良時代

該期にあたる住居跡は、8世紀前葉のものが2軒（第7・9号住居跡）である。木上土遺跡では、住居跡は32軒で、6世紀後葉に次ぐ軒数が検出されているのに対し、当遺跡においては少ない。これは、舌状台地の北側（基部）へ集落の中心が移行したためと考えられる。平面形は方形で、規模は一辺が3.4～3.7mである。木上土遺跡の同時期の住居跡に比べ、やや小形である。主軸方向はN-0°前後である。出土遺物としては、ボタン状のつまみと口縁部内側に短いかえりを持つ須恵器蓋や土師器常総型壺がみられる。



第53図 内宿井戸作城跡縄張り図

平安時代（10世紀）

該期にあたる住居跡は、10世紀前葉のものが3軒（第1・5・6号住居跡）である。木工台遺跡では、住居跡は17軒で、調査区内全体に散在している。

平面形は方形が1軒、長方形が2軒である。規模は長軸または一辺が3.4～3.8mで、小形の住居跡である。主軸方向は2軒がN-0°前後、1軒がN-87°-Eである。

出土遺物としては、ロク口椀形、底部承切り不調整の上師器坏、ヘラ磨きと内面黒色処理が施された高台付碗や足高高台付碗がみられる。また、第5号住居跡から外面に格子叩きが施された上師器寒の体部片が出土しており、同様の上師器寒体部片が木工台遺跡の第134C号住居跡（10世紀前葉）からも出土している。

中世の城館跡

当遺跡の調査区内から土塁2条、堀2条が検出され、断片的ではあるが城郭構造の一部が明らかになった。そこで、城郭跡の全体構造を把握する目的で縄張り図作成を行った。第53図は、目測、歩測と巻尺による簡単な計測で作成した略図を、地図と航空写真に照らし合わせて修正したものである。

調査区北端部の第1号土塁は北東から南西方向に22m延びている。第1号堀は第1号土塁に沿うようにして掘り込まれていると考えられる。調査区の北西部に確認される土塁は、北東方向から南西方向に約24m延び、そこからL字状に折れて南東方向に約16m延びている。その先端には、最大径約7m、頂上部の標高35.61mの物見櫓を置いたと考えられる櫓台がみられる。その土塁の外側には、土塁に沿うように堀が巡っている。第1号土塁とL字状の上塁の間は開けており、虎口であった可能性がある。

また、現在残っている道路のうち、第1号堀に沿うように通っている道路とその中央部から南方向にT字型に延びている道路は、位置から城郭に伴う道路として当時から存在した可能性がある。

調査区南側の第2号堀は東西に約40m延びているが、その南側に土塁が、さらにその南側に堀が巡っている。土塁をはさんで二重の堀に掘りきられた様相を呈している。またこの土塁と堀はさらに西方向に延びていくものと思われる。また、第2号土塁が第2号堀等に直交するように南北方向に位置している。これは、外敵が堀を移動するのを遮断するために設けられた施設と思われる。

調査区の東側斜面部には、等高線に沿って平場を削り出している。舌状台地の南端や南東側にも土塁、虎口、平場と思われるものが確認された。

この城郭は、沖積低地、武田川、舌状台地の自然地形を巧みに利用したものである。第2号堀の出土遺物である常滑系陶器片等から、この城郭は少なくとも15世紀前半まで存在したと考えられる。

参考文献

- ・ 龍ヶ崎市教育委員会 『龍ヶ崎の中世城郭跡』 1987年3月
- ・ 茨城県教育財団「主要地方道土浦・大洋線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 神明城跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第48集 1988年9月
- ・ 茨城県教育財団「国道354号同補道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 木崎城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第109集 1996年3月
- ・ 茨城県教育財団「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 木工台遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第140集 1998年3月

写 真 图 版



内宿井戸作城跡遺景



内宿井戸作城跡全景



第1号住居跡



第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡竈



第3号住居跡



第4号住居跡



第4号住居跡竈



第5号住居跡



第5号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡竈遺物出土状況



第6・7・8号住居跡



第6号住居跡



第6号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡竈



第7号住居跡



第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡



第9号住居跡遺物出土状況



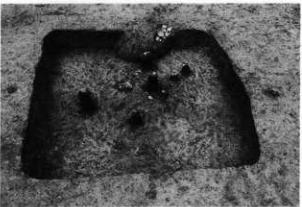
第9号住居跡



第9号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡



第10号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡竈



第10号住居跡竈遺物出土状況



第11号住居跡



第11号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡竈遺物出土状況



第12号住居跡



第12号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡遺物出土状況



第13号住居跡



第13号住居跡遺物出土状況



第14号住居跡



第14号住居跡遺物出土状況



第14号住居跡遺物出土状況



第15号住居跡



第15号住居跡竈



第16号住居跡



第16号住居跡遺物出土状況



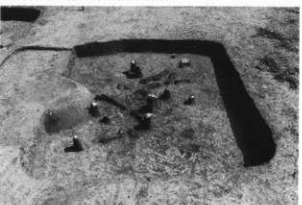
第16号住居跡遺物出土状況



第16号住居跡遺物出土状況



第17号住居跡



第17号住居跡遺物出土状況



第17号住居跡竈



第17号住居跡竈遺物出土状況



第18号住居跡



第18号住居跡遺物出土状況



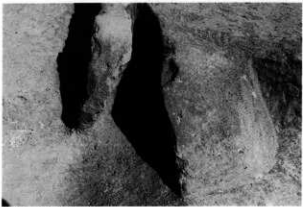
第18号住居跡竈



第19号住居跡



第19号住居跡遺物出土状況



第19号住居跡竈



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



第1号土壘土層断面



第2号土壘土層断面



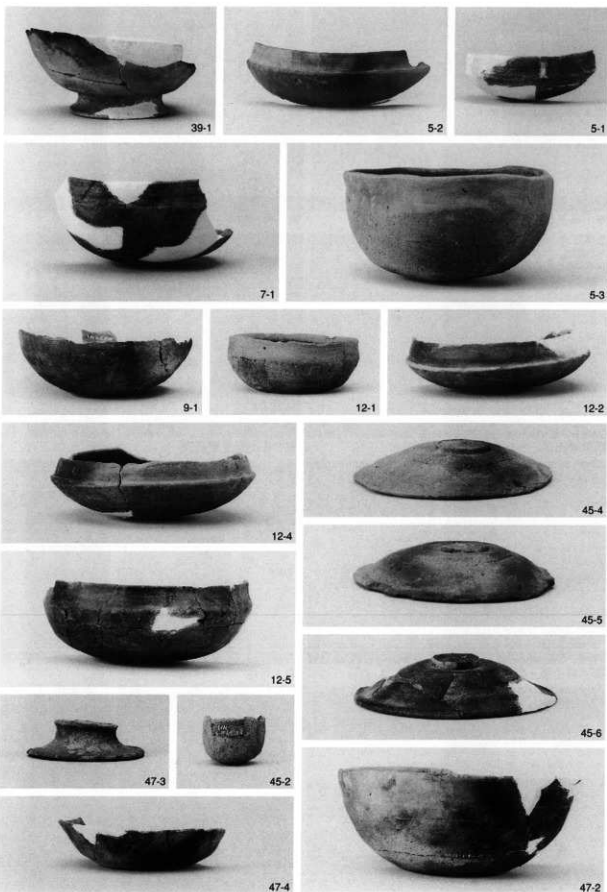
第2号堀



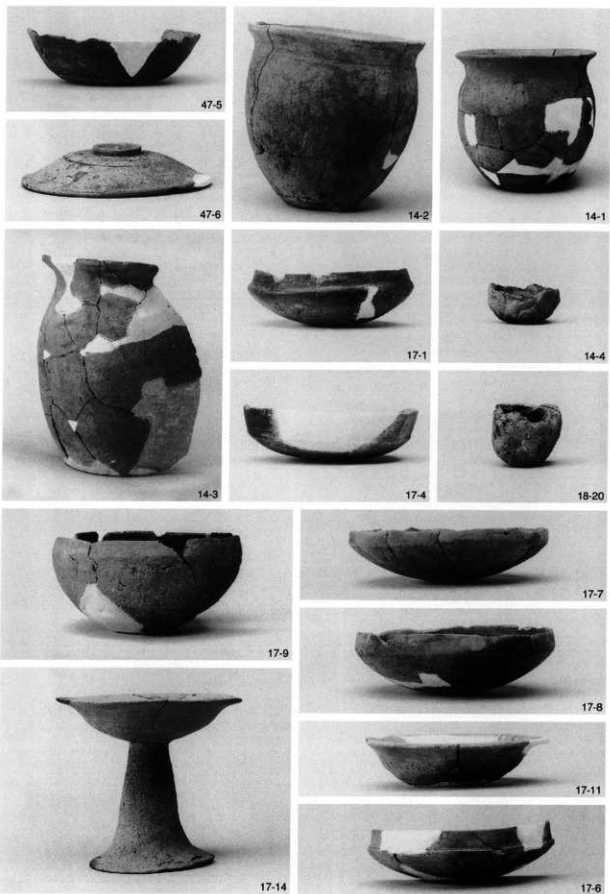
木工台遺跡試掘トレンチ1



木工台遺跡試掘トレンチ2



第1・2・3・4・7・8・9号住居跡出土遺物

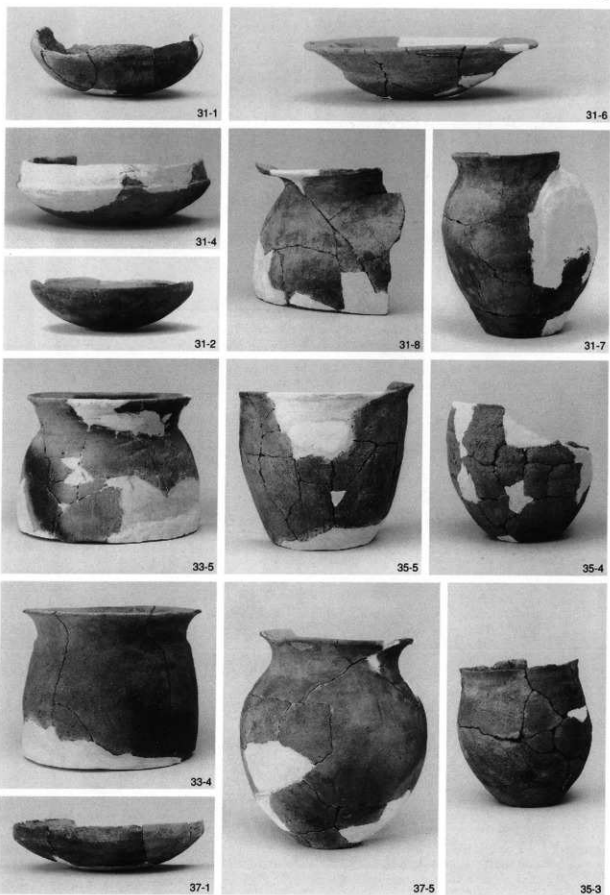


第9・10・11号住居跡出土遺物

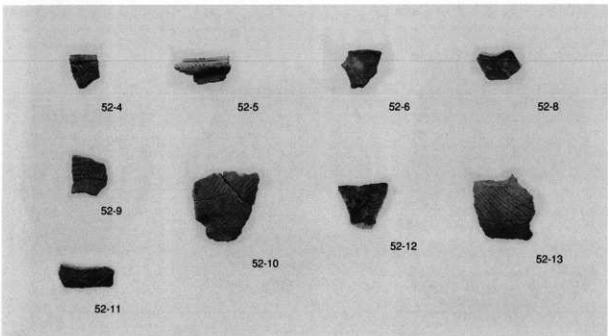
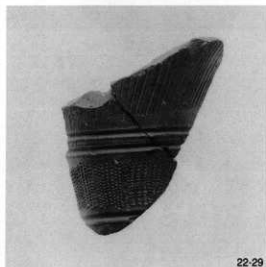
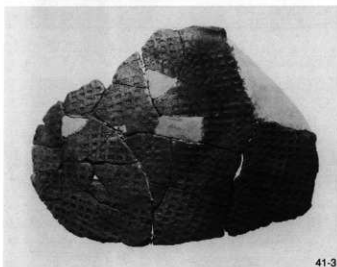


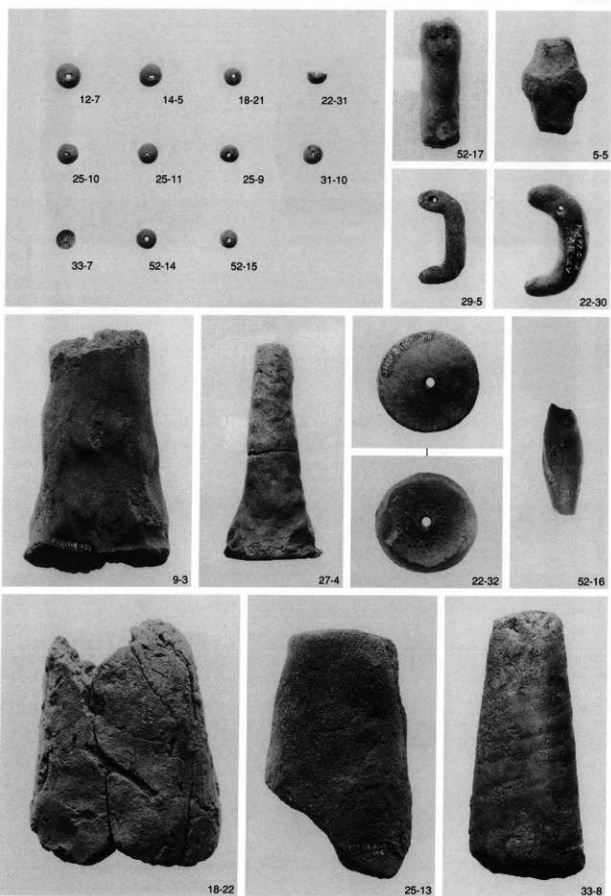




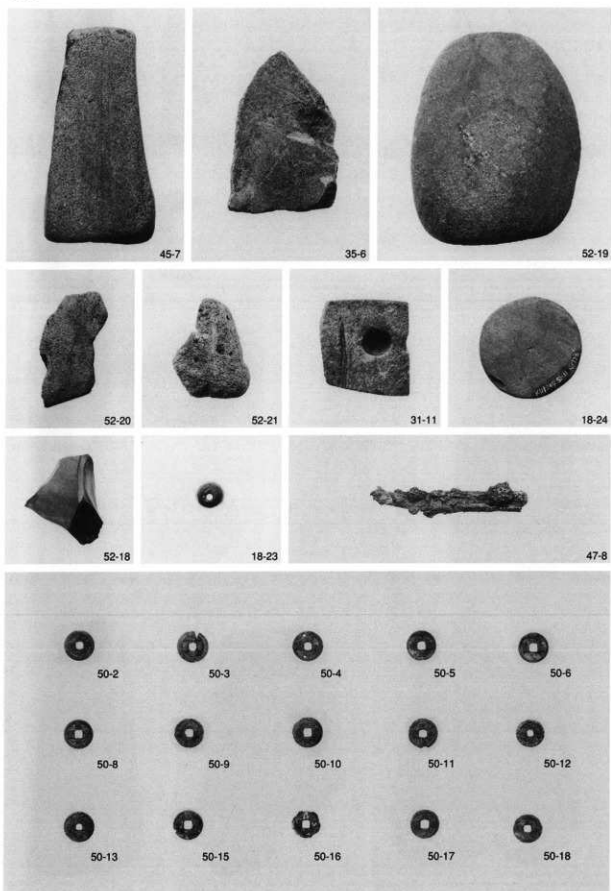


第16・17・18・19号住居跡出土遺物





住居跡・遺構外出土土製品



住居跡、堀、遺構外出土石製品・鉄製品・古銭

茨城県教育財団文化財調査報告第153集

北浦複合団地造成事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

内宿井戸作城跡
木工台遺跡3
(旧木工台古墳群)

平成11(1999)年7月26日 印刷

平成11(1999)年7月30日 発行

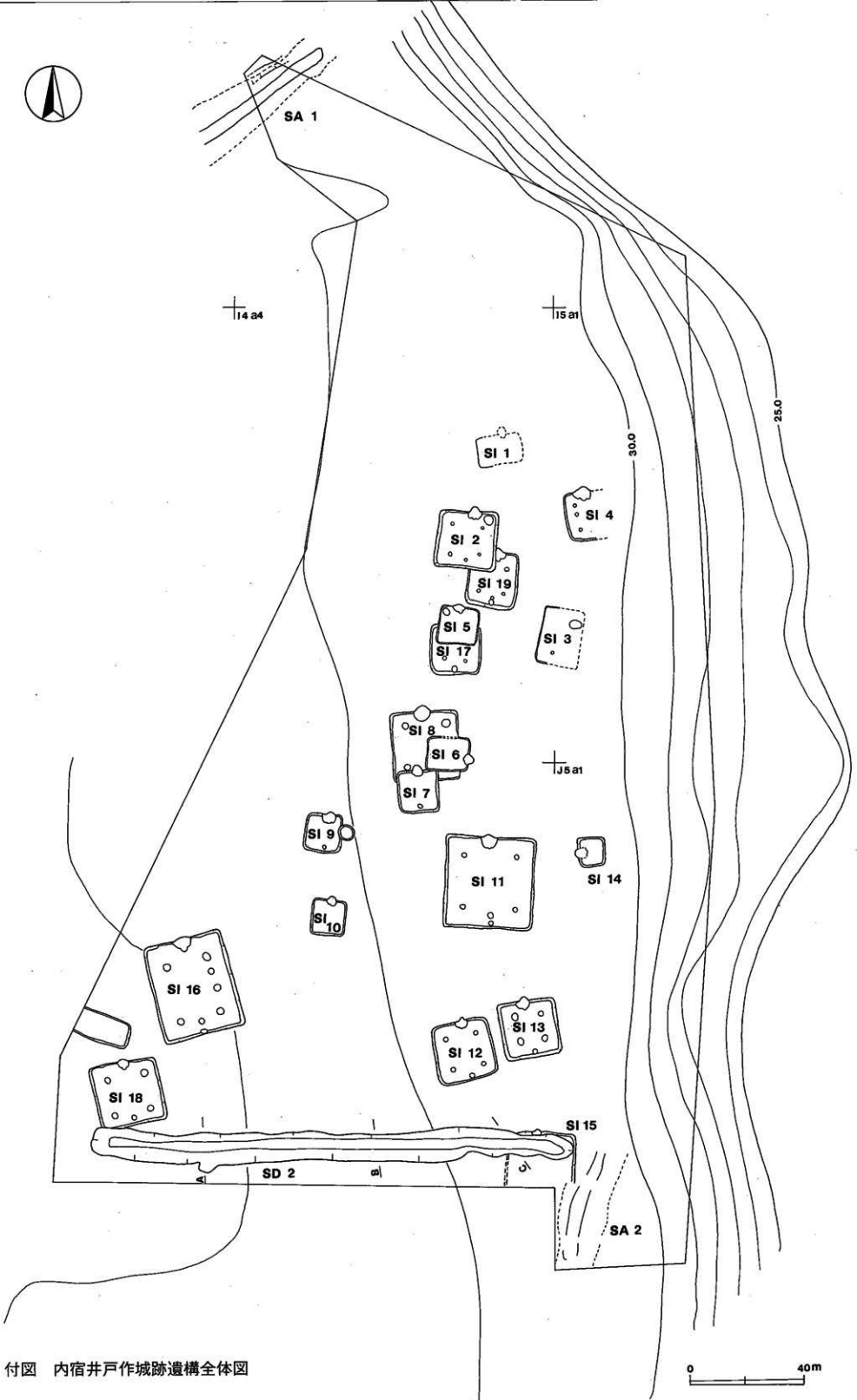
発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地2号
T E L 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433-33
T E L 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第153集

内宿井戸作城跡



付図 内宿井戸作城跡遺構全体図

0 40m